

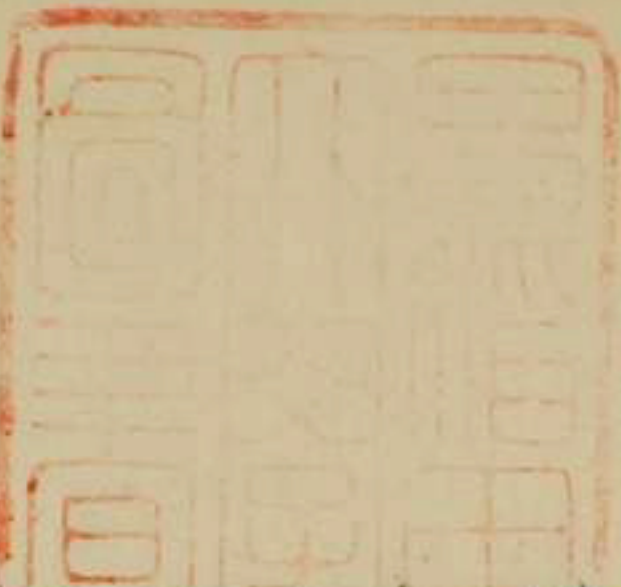
善光寺道名所図会

三

ル 4
3657
3



凡 4
3657
3



善光寺道名所圖會卷之三

目錄

- 善光寺驛
- 如來堂
- 年神宮
- 定念佛
- 經藏
- 山王塚
- 大本願
- 阿闍梨池
- 社家
- 朝日山
- 閣浮檀金
- 北國街道
- 三門
- 昆沙門堂
- 高雄塚
- 辨財天
- 諸神塚
- 六地藏
- 牛頭天王
- 制札
- 大岑山
- 本尊如來出現
- 美和神社
- 二王門
- 四宜樓
- 鐘樓
- 秋葉宮
- 萬善堂
- 大佛
- 御靈屋
- 番所
- 熊野社
- 月蓋長者説
- 時丸の塚
- 御供所
- 寛慶寺
- 骨堂
- 兄弟塚
- 別當大勸進
- 寺中四十六坊
- 攝待所
- 大門町
- 諏訪社
- 百濟王説

一
廿四

本朝來現	聖德太子說	本多善光說	難波掘江
伊奈郡寺建立	檀越略系	堂内年賀式	光明常燈
戒壇廻	汰然上人舊跡	親鸞聖人旧蹟	笹字名號
善光寺四號	鏡の御影	年中行事	寺領
元録造管録	善光寺紀行	苜萱堂	血脉頂戴
ゆくとんど薬師	山吹の瀨	長原温泉	善光寺七社
同七橋	同七清水	同七井	同七塚
栗田刑部城趾	横山信濃城跡	塩沢温泉	桂山古城
飯繩里宮	御供所	仁科氏宅	飯繩奥岳
駒返	千日屋舖跡	篁屋	飯砂
天狗の遊所	飯繩原	劔ヶ岑	

善光寺

登丹波島一里あり越後の方へ下るふ善光寺より荒町一里
 半礼二里半柏原一里野尻一里越後の関川一里半足との
 順路七里あり野尻小湖水より其流を越後の今町の溪へ入る
 此川と関川とついで野尻の湖水も流すといふ水はつめり其よ
 人馬も往來せり但願河と八重りて巖をのちハ風荒く浪言く
 氷結ば次早春にむりて始て凍まり湖中に岩あり辨賊天と安む
 按るに半礼より柏原野尻越後の関川二朕関山二本木荒井とと
 中山八宿といふ又善光寺ハ北國街道の宿驛小して本名水内
 郡柳原庄荻井郷長野村なり如來此所小遷座の後地名もさ
 猶とて惣名善光寺と稱する成べし

善光寺より東へ伊勢町新町淀橋と渡り横山村の次三輪村の南
 脇小美和神社と路へ神名記云美和神社
水内郡小八座の一也社家ハ高友伊豫守といふ三輪村ハ北國
 十五丁やどまき三輪村の北脇小時丸の塚とて古墳あり善光寺七塚の
 其一あり

三輪村
美和神社
神名帳
水内郡小八座
の其一カ



春江補畫

三ノ二

○定額山善光寺 水内郡榊原の庄芋井脚 長野村の霊場なり

天智天皇三年甲子草創也むう天台宗はく三井寺持なり
其後真言宗と成り高野山に属しまた寛永年中東叡山
に属し再び天台宗に帰次

本堂南向高廿丈二重屋根撞本造柱の数百三十六本垂木の数法華
經此文字の数 法華經文字の数ハおよそ 六万九千三百八十四字といふ 小准ふたり四方以上段有リ正面
の板舗小大なる香臺と置く香爐の右股に太鼓あり左股小花瓶あり

松を入る足と親鸞聖人淨手生の松といふなり 毎月朔日小 挿代ゆかり
本尊閻浮檀金阿彌陀如來と本堂西庇の間に安置し御厨司四方に
戸帳あり應安二年申三月三日と記す其外を綾錦金襴等
みく七重の包むといふ秘佛ありて毎朝の閑扉といふ戸帳扉一重
閑くのまはり中の間より東へかき善光善祐彌生の前と安置
いけとび善光を中央小わく事故ある夏好也

塩尻

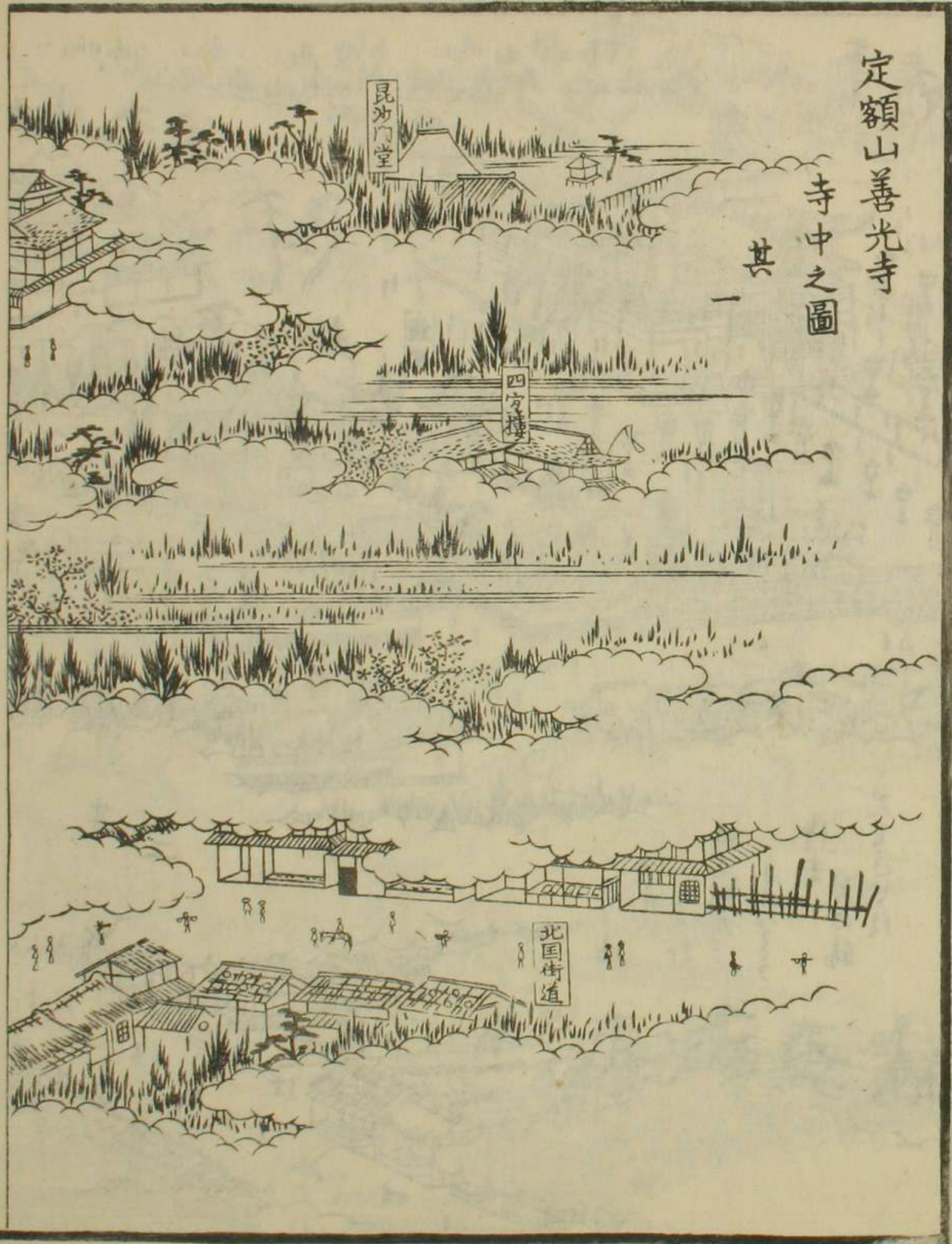
善光寺本尊ハ一光三軀之是を新小模鑄しつら尾張國熱田乃
僧定尊法師靈夢によつて建久六年五月十五日中尊ハ
鑄成し同く六月二十八日小菩薩と鑄きるとかんあき之尊
別軀れと先う又画像ハ伊豆國走湯山の僧淨蓮上人兼久
三年の春告によつて御戸と開き尊像を捧げ自圖像せり
同年五月佛工越前の法橋海繩鑄鎔して模さしや

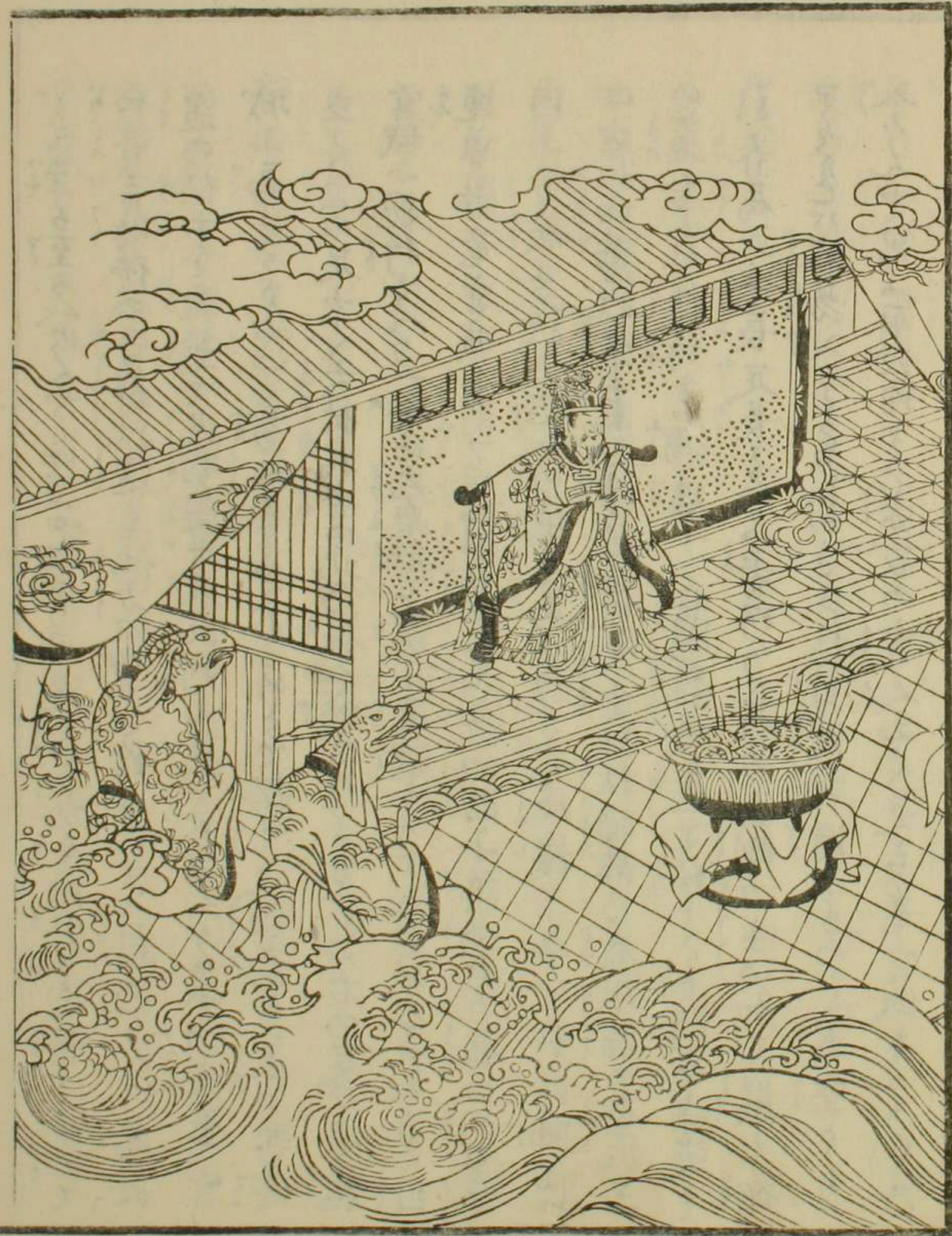
按小定尊法師ハ九歳の時法華と誦をまより三十二年ハ間法
華と誦するて凡四万八千九百部と云其後又法華一字毎
に捧げ弥陀乃名号一遍唱へて一千部小満川實ハ建久六年
四月六日其功畢了其年ハ十一月六日善光寺如来の告と感得
し一万余千人の慈施を勧縁して金銅乃尊像と鑄と云
抑善光寺ハ本尊を生身の阿弥陀如来と称する所以を崗侍り
其むく中天天竺大聖釈迦牟尼佛長者月蓋乃慳貪なる代

定額山善光寺

寺中之圖

其一





即連尊者
以神通到
龍宮城得
閻浮檀金



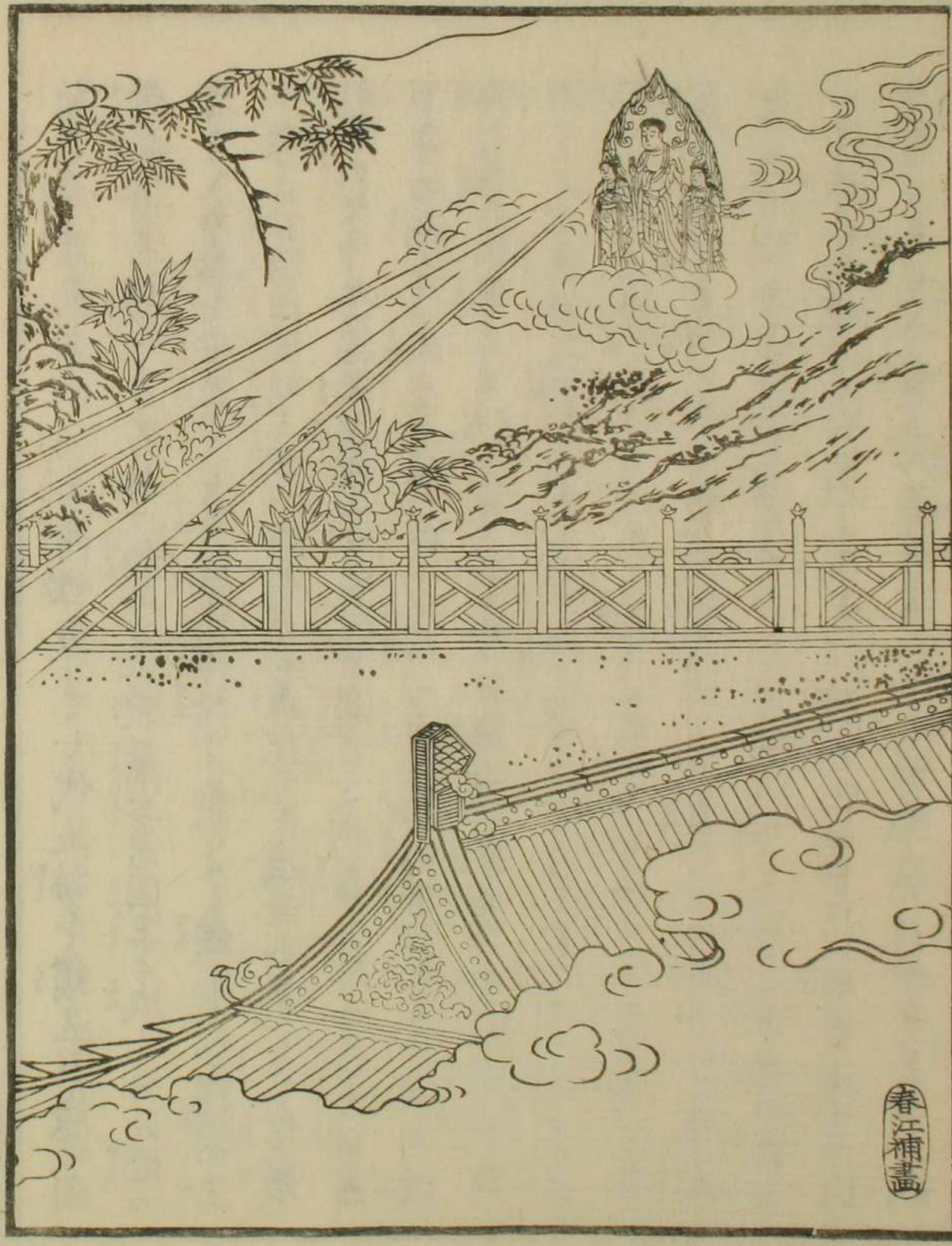
此法うら足く走しん事如くあるは佛の財金と成とも送り
参りてはるのいえを拜すといふと宣へて同連関くおの
やう吾佛前におひく勅を受殊ふ大衆れ中よりは使者に拝
たぐむ如く帰らん事本意なると業あり神力を現し
奪ひ取らんを氣やせぬとぞなりと思ひぬすのり不解く容
易なるまやのやあむと何とぞれお給ふ言よせく釈迦佛乃
因位のまうとぞ我語り給ひたる 中畧 龍王是を聞て誠し理し伏
しきる氣色や斯ややく尊者怒りまをさるるを伴に隨ひ
此紫金を捧申さんまをさるる容易くまをせん尋常の軽き
資れ如くや思ひ給へるは竜宮第一の重宝なるよと演く奇
異の譽言も預らん為かくい申せしは所は此金をいひては勅を
蒙らん尤かく尊者の来臨もさるるは且も仏勅具はは資料
なり争ねしと申まきと其位座を起宝塔の扉と開き閻浮

檀金三千七百兩と手自取ゆ恭捧奉らる同連紫金を受
取此功德廣大たるよと演説して利那小毘舍離國に皈て閻浮檀金
と世尊に奉りてのひたる世尊歎き給へは月蓋長者も悦ぶ支限なく
かくて彼金を玉の鉢に盛て臺上に備置彼三尊を請へ奉りて三尊
忽光明を放ちて照しぬ又釋尊光明をえられしをこれ光明ゆ
閻浮檀金と照しぬ不思儀なるれば金忽やつき沸きかぶ
成れきつ干時釈迦牟尼仏三昧禪定小入らる給ひ淨身に積歩
給へる功德六度十婆羅密十力四無所畏三十二相八十種好内外
一切乃功徳を現しぬ又然とぞ禪定より出さるをいひ令れ向
印し給へる忽と尊者の聖容小違つて金色乃佛體と變りぬ
我有難き良あゆむ本佛歩まう給ひ新仏の頂と三とび接た
はへ新仏又三度禮し給へる二仏同く虚空に飛より住ま
ぬ其高きより七多羅樹の如く俱し光明を放ち神變不測也

粧ひを現し西方に飛行のひきき月蓋遙小拜し奉り夢とせり
に申するに新佛を依り奉るに南閻浮提の本尊となりたり未永
劫の衆生に至る迄利益と蒙りめんが爲に奉我願を空しく本土に
を呼ぶふぞと教き悲しく色は虚空よりあつてなるは壽となりて汝
暫く待へし本仏を送り奉り必歸来ると告させむひしがやがて飛
皈らせ給ひ西乃樓門の上に立ちまうとて長者歡喜あつて
如來を請り入せ奉り金銀七寶を鏤りて造り大伽藍を建
立し五百人の比丘を扶持し六八弘誓の願力をあき不斷礼
拜せしとせり是併大聖釈尊に厚恩なりかくあつてはわが
奇特の有るに長者を初其外乃眷属總く毘舍衛國の万民もや
く々大林精舎に詣りて菩提の道に入るを我朝に出現し
給ひ善光寺如來や申し此御佛に事奉らむ

正身如來重廿六貫三百目 前立二尊一佛重廿八百七十目宛

斯く月蓋長者も同名同姓ありて七代迄跡を續五百歳の間
榮華に榮へ樂り其後此願ありて天萬葉の國王と成り世に恐る
者なく如來を安んじたり隨值供給し奉らん願しう其次の生
み於ては百濟國聖明王便月蓋長者の再誕是偏に如來不可思議
れ佛力ぞり本尊天竺國ふまうて衆生と利益し給ふ其年月五
百年の間ありまう百濟國に飛行あり是即月蓋長者今も彼
國乃大王と生れり所以あり如來は百濟國の禁闕に望み空中に
佛々々々光明を放ち給へ玉殿庭上耀きまうて見く清くくの
臣下上下の官人とももいと怪しめ天子を此く御覽し
驚き給ふ事限り也如來光明の内より顯れまひあつては群
衆して告給ふ事ありて驚き吾のまは四十八願の主西方極樂に教
たり左右の侍者の救世に大悲衆生護念の薩埵あり抑聖明王の前
身むし天竺に在り月蓋長者たり時無二乃信心をもち我



極樂淨土より吾を請ふるを切るふより吾又應化して長者并
以眷属と初其外群生と濟度と是偏小我奉願不取正養乃誓ひ
ゆへなり此功德に依り長者の願望に如く帝位を備ふる志をも十
善の榮華に誇り無常と志し三寶を歸する志を失ひとらむ
小惡果れ業とかりけ後まこと三途の故郷に歸りて永劫の苦みを交
む事見らふ志のびと昔れ機縁はさげらふ小濟度利益をんが為今
此處小来現せりや告りて佛拜聖明王此耳にうると忽宿習開發して
信仰の心肝小銘と感涙袖小餘り庭上より玉の冠を地よつと悲愧懺
悔し虚空と礼し給へりまふして玉殿をあらひ佛間と稱し如来に
請し奉るは二尊に如来微笑の佛眸を廻り空中より紫雲に乗
殿中に入移りて異香四方に薫り光明耀きつりて万法の燈火を一
夜あらるに異なり御門を初后宮女諸臣百官渴仰恭敬し奉
り感信の誓をたしと鳴をあらまはる三業の精進を勵し六時の勤行

急り給仕恭敬し終ひたり如来百濟國に御化導年月をうら
く一千百十二年に成り其間の帝王九九代とを聞えり
然る小九代の天子を推明王と申す如来の帝に告りてや吾ら
土れ流生と機縁既小熟しぬと今より他方にあり其所とつと是より
東海をあらと一の國土あり大日本國と号し彼國に到り群類を濟
度とせりと告りて佛門を初后妃百官下下までと聞傳へり御
つととあらひ懇しむ事限りたりと他邦に往り給りて人の法示
現度とされ千人の僧徒法く外陣より出り奉りて余り
法名殘とありてとてやうく内陣に入るとせりが長老やうり始
如来此國小到り時雲に乗じて来りて終るは度とまこと空をうけ
て日本に渡りてより飛行自在の佛自ら何とて免まると
も凡夫の力あら及がと誓くも當め奉るを眞の知見を憚り
又佛慮も計りて只日本に渡りてよりとやきればみねく

此議小同トける法門中とは別を歎き悲しむ多しといふも併乃法
告かれバカ及をば詔を下して日本に送り奉て給ふ法船をこそ用
意し給ひは七寶と以て飾り金玉の檀を挿へ錦繡の褥寶蓋等
のさう十人れ傍於如来を清輿に遷し奉れば大臣百官供奉
成り清門太子后妃侍女の四方く玉に簾を掲げ清名残と
とみまひる其外國中れ賤男少女に至る迄巷に云は依り法別
を惜む悲む群四方に響くばりなり斯く法船に移らせまへ水主
梶取樽擢を取海上に漕出まほしく如来に附奉依日本への勅使
中々西部姫氏達率奴利致契思率多利致衍等其外二人の傍
あり日本に添えりし状云

純金一光三尊阿弥陀佛像長一尺五寸同脇士
觀世音菩薩得大勢至菩薩像各長一尺同奉副
經論幡蓋臣聞万法中佛法最善也諸道之中佛法
道最上也是法難解難入也周公孔子猶不知是

法能生無量福德果報乃至成辦無上菩提遠自
五天竺泊三韓依教奉行天皇陛下宜修行故渡
傳帝國佛之所化我法流東故附使貢獻宜信
者也貢上如右已上

斯く法船と出しは法門后妃もろくの侍女を具し給ひ日
頃も翠帳内居まはし路頭みは出まされども如来の法別を
然し人の見る目と愧ぢり海乃邊に出させまぬい宣ひらる
我等五障は雲厚くも三尊の光も照さる奉らむ事今生の
樂く悦びい以後といふ業障の雲霧を拂ひ淨土は月夜詠
奉らん娑婆は別を翻し淨土の再會は縁となさしめぬと
自ら清衣の瑞瑤と採り如来に供養し奉り法船小繼り乗務ら
ぬふくを見し其傍海中に飛入り大往生とぞ我らひり乳母
大臣百官もろくれ宮女もろを騒ぎされども力なく只忙然と
憧如来に別奉らるるみよ又法后もろ別を奉りせし誅妄執



如来百濟國
 より日本に
 渡りて来り

春江補畫

乃雲に迷ひたり我等とも曰く浄土に導かれんと稱名の夢ゆら共
小續つゝ海に飛入りて理りゆをきと哀なり終く入水の人二百五十
餘人とや聞けり忽紫雲海上に變遷來り聖主來迎り引接りゆよそ
有難き異香四方に薫り音樂響に飾り極樂往生の相を現せり
人聞人をも祠も及びて感涙小沈みきりけり國中貴賤日月の光を
失ひ只闇路と測れ心地して釈尊入滅の首に異なり候斯く浄土を
波浪と凌ぎ飛ぶ如くに驅ゆれ島々浦々ら過りて事故なく大日本
國根洲難波津小半夜の鐘と俱に着るゆ大光明と放らゆ四方に
山々忽金色の光と成ぬる

抑我朝小生身れ如來來途あり人皇三十代欽明天皇御宇
十二年壬申十月十二日なり其比の内裏大和國山部郡斯岐乃金
刺の宮に申奉る去後小百濟國に官使并に二人の僧如來來寶蓋
と昇り内裏乃庭上に居る推明王の書翰を捧ぎ其よりと奉り則

殿御小達しきれ御門諸臣と召せり百濟國より渡り所の佛像經卷
受納せりや否を問はれ此時一同に奏しきり外國より渡り所
佛像敢て納免るべし其故を彼國より日本を窺ふ事度く
然きとも神國の威風小恐怖して近侍を能く今此像を渡り奉る
日本と呪咀し調伏する為なり人速く返りあつ然るべしと奏し
あるに蘇我大臣稻日宿禰奏して曰く國小道有る徳なり道有
り恥り異國の華假令若は日本に野をばしとさむとも今を惡意
以翻りて我靈像と渡り佛經を送る条偏に日本に威徳小あり
や夫我朝を神國なり神明の本地と仏として貴敬せば可なりあな
還さきんに於て小智愚昧れ國なりと侮り吾國を窺りて必定成
る一尤尊信しりゆと形像ありて御門召し蘇我大臣小勅
りて異國に使者に佛像安置供養の儀式を向し先給ひぬ天皇志
く此由を殿内侍に詔せりて小墾田乃所殿をあきき如來遷

し多し香花燈明をかりて珍物寶物を供養し奉り禮拜恭敬し
ゆひたるかく異國の使者に引出物を賜り返書とありて二僧と雷免
河眼を給りきれば使者を百濟國に歸りて其後獲我大臣の宅
に佛所代新小構へ如來を迂し奉り金銀珠玉に莊嚴を盡し七
寶を檀錦の帳花綉帳蓋に至るまで善美を盡せり或時如來乃
眉間より光明とをたら十方を照し多しければ禁闕の殿舎宮女曹
司局に至るまで輝れりりて實小生身れ佛神方とは露鶴不
思議教くしく値遇し奉り葦利益を蒙らざるをば御代も
穩し十九年れ春秋とせ送て途なる然れ小庚寅に當り今年
如何なるゆへあやなく所々に疫癘流行して貧賤男女親よりの子とほ
きぎて是をくくみ其外牛馬古畜れ隔なく市中山野小くりて歎の
勢止耐なく依りて河内宸襟を悩む多し群臣眉代鬢むるをり御を
内裏ゆは大臣公卿其外諸官と召さる天下安全ありしむべき評議

とぞ閑し召るる其時物部遠許志大連奏同中ささるる借ひ疫癘
を致へし小異國より不思議の仏像と渡りくるは御崇敬ある故なり
の多異なる像を本朝に渡り奉り其例を以て所なり依りて我朝乃天神地
祇異國の人形と崇り神祇の威を失ひ多しと怒りて陰陽の氣順環
勢に病病の悪氣と變り國民を悩むる奈明なり夫吾朝を伴
并謗伊并冊の尊より一氏も異姓を混せ居皆く正しは苗裔なり
然るに異國れ人形を借養り尊重し給り我朝の神祇乃出あり
國土の人民小到るを争り異人の形像と捨く出さる神祇を敬れ
給ふると憚なく申されきば結郷一回此議小同し奏同中ささ
きれを河内もいより閑るく申し所實ふ志と信し多し評議既
小究りて勿辭なくも生身れ如來を失ひ多しきや成小けり有
しるど遠許志大臣下知りて河内抄津より鑄物師數り召集り猛
火盛に吹立て勿辭なくも如來と取て其中へ投入なり七日七夜吹たせ



春江補畫

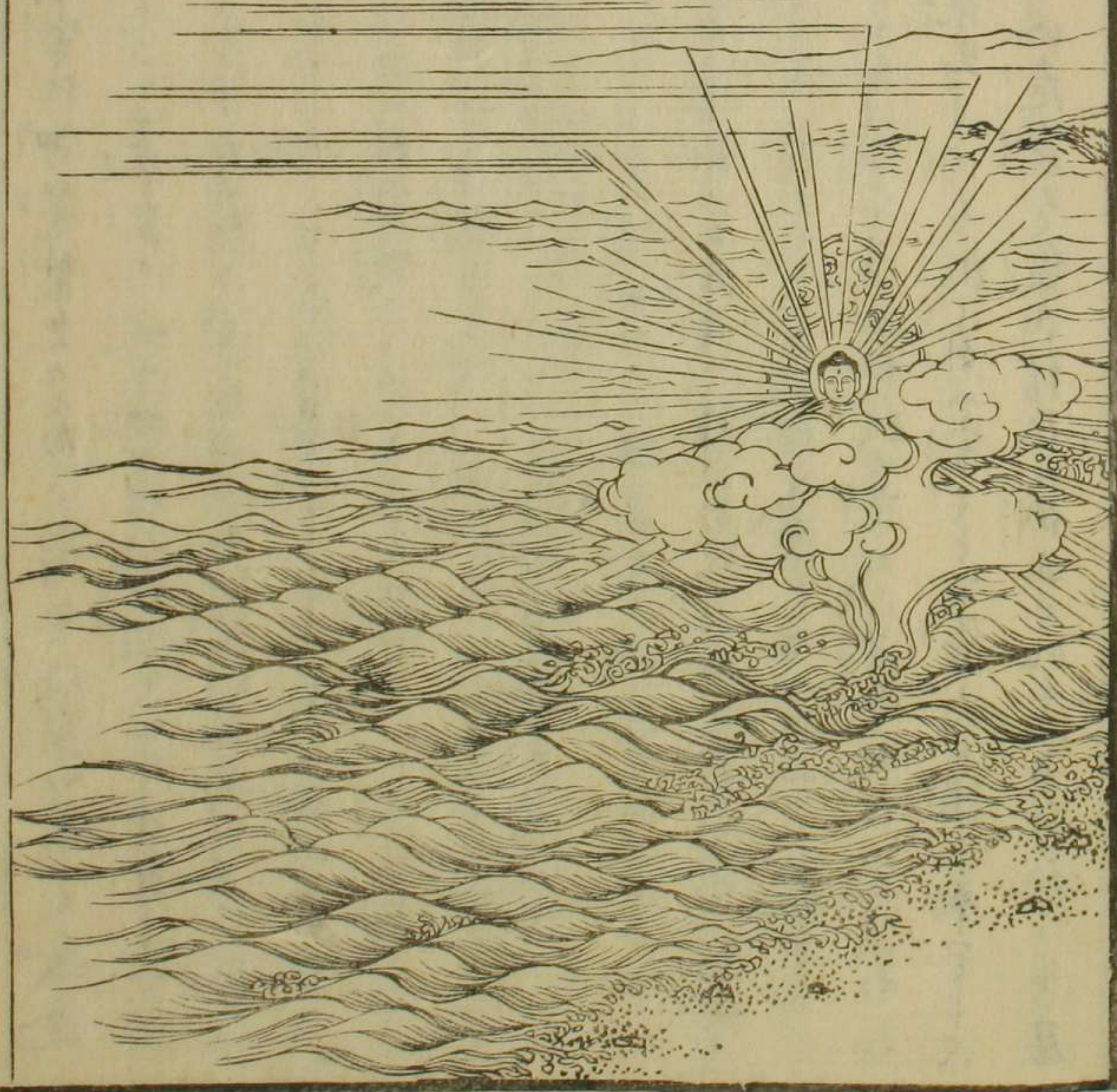


眞弓皇子
守屋連小
襲きたまふ時
棕の冥樹との
危急と援を
奉りしなり

ども如來の淨身の色も愛さず所もそとねむる見聞の輩古のきき
あやいと身れ毛と立音を巻て我恐さる大匠も今興さ久穴怖ろし
只水底に捨よそそ難波の堀江に身を捨よ其後世間にはまりの希
有多うりた聖年辛卯の初夏小欽明天皇崩御まうり遠許志大臣
も疾病に床に薨りぬむろ梅度波羅門も悪言を以て替時佛を
謗り替小よろく無間地獄小墮まり假令給小摸さ本に列むも仏神
を崇むるや我義の叔敏達天皇御即位乃後所不豫より上下万
民怪しみ教を以てつるり博士を召り考へさせむら以奏して曰所
悩の事前帝は所代は焼失ひもふ不佛像の崇りる事と中は所門
を初奉る諸卿大に驚給ひまて勅使と難波堀江にほけり給白
さゆぐれ懺悔をせし申さる其時如來水面に現り光明耀きされ
ば急死此より奏聞し中て内裏に給り入りぬぐの供養をな
し給ふる昔も過りて所悩も平ふるを給へ貴徳悦

びの色も一萬歳を我唱へたる爰又弓削大連守屋大臣
遠許志の大信思案を運り泰内の折り奏りたる先帝の所代に
る此人形と礼しねまに西土表へ人民病悩もとて永く失ひ給ふ所
今又先君は例に宵に給ひ尊崇し給ふと所不孝とやうそん奉朝
れ諸神怒をなし給ふ事必定あらん失ひ給ふにまらあじと也
帝又此儀を信し給ひまらぬ汝が奏する如く先帝の舊儀に隨ひ
吾朝の神祇を敬し奉らんと詔有る守屋大に悦び某が為すも敵ぞ
うこそ河内紀伊國より多れ人夫をり寄せ斧鉞を以て打碎るを
まをた盤に碎り鍔を折り伴時を斬り損り給ひ貴賤忙然とて
物に者なり守屋今力盡き大息突り假令千日千夜打り焼とを
損滅せむる只元の如く堀江に沈めよとて黄金に妙持伴具返水底
沈免金軸の経巻を波の上よぞ漂ひたる又曰假令佛像を失ひぬる
附ちりた系僧を安穩にまらを重く併法派知むる一とて捕

本田善光難波堀
 江を通りて水
 中より光を放ち
 けり驚き走り過
 りてて代御聲
 ありて善光を呼
 止めぬし三尊佛
 阿はれ昔の機
 縁を示しあまふ
 走り生信信
 供奉しなりしと
 則善光寺本尊一
 光三尊仏是なり



て法服を剥ぎ穿に押籠禁免多かるく丙午八月小つらく敏達
天皇崩御ありて帝弟清位を継せ給ひ用明天皇と申なる清后ハ
穴太郎皇女とぞ申る然るに清后或夜の古夢に氣高き僧坊枕上に
行く後の胎内をやり給へん後の古答に自分胎内甚く穢けりものと
仰き後信の曰吾に救世の願あり我を去る西方よりと宮に拜と俱
后れ清口に飛入給ふと清境して懐妊す一、ちる聖徳太子是
胎内に十二月在る麻戸の王子一、皇子等は名あり推古帝二十八年二月
五日薨と壽四十九河州科長の陵に葬る今上の太子といふ
非皇
按る小厩戸は皇子の清降誕ありて後不測の奇瑞多かるく中
に初くて異國の經論を流通し給ひあるは守屋の大連と交戦の
折柄も掠の靈本に隠りて其危難を遁せ給ふ事なと所怪しき
似たりといふも爰に譬とどる小神代の昔大己貴命諸神の猜ふあし
給ひ一時嵐出く内を洞く外へ穿くとて己が穴を限し奉りしに
よりて焼野の危急を禦給ひ給ひ例も比まらんや終小の屋

と誅戮し給ひ難波堀江小如来と云言事をかり其佛教を受用
し給ひより承く本朝に其道知まり君臣上下信用努むと下
事なく衆生化益れ奉成立給ふ事い大なる功勳ありは是
併なり皇大神乃御を小應トたむいんば幸々神國小跡
と重給ひんや爰よりく古に成りし神祇を尊崇するに次
に恭敬し奉るべき靈像とて作給ふ事多
人皇三十四代推古天皇十年壬卯に當る四月上旬に頃信濃國本田
善光といふ者都の勢事終り此序ありて名所舊蹟を見巡りて
道此便小は多て難波堀江にこりてけるが何れも水の中より
光りて見えなればありきうらまやと走り過むとる後より
夢ありてやら善光怖々事たると我ら古生世世汝小機
縁ありて安置さるる阿鉢陀伴なり汝静小きけ昔の因縁
を示さん我汝を待り年久しや宣ふ御夢殊勝小吳香薰ト

々色バ善光たりまら信作の宿縁開發して不審るが申々るハ
あうバ其過太れありさむと示し結くとけり則は告に曰

昔在天竺名月蓋
次在百濟名聖明
今在日本名善光
我今尋汝來此處
生世護念汝
故我隨汝往東國
奉請如來致恭敬
我飛彼國被安置
三圍一鉢同檀那
早仕宿縁皈敬我
如影隨開不暫離
欲令利益惡衆生

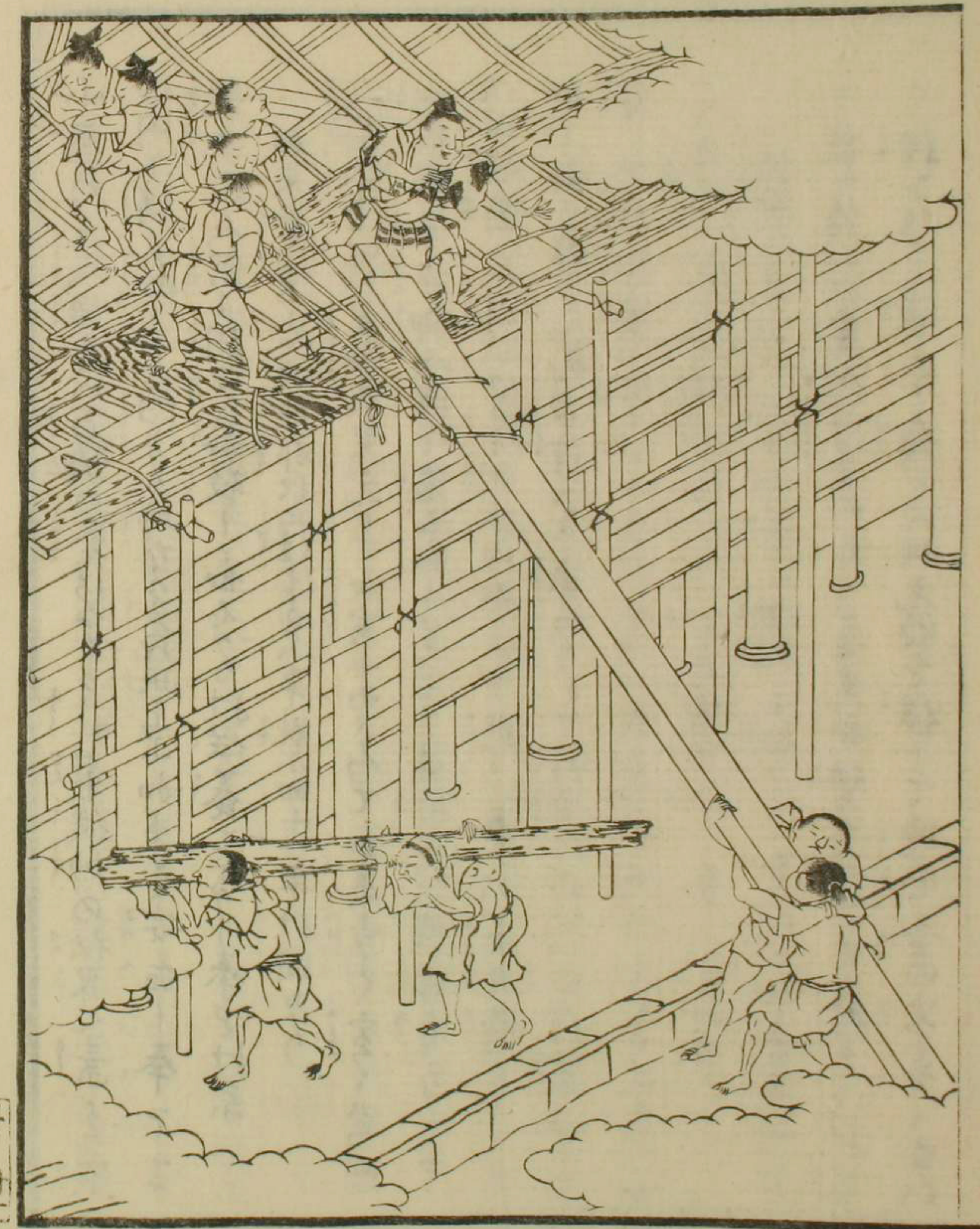
如來重て宣く我汝を待ん為度の水屑と俱小年月をふり之
凡十六年 時既小至さう汝我を具して奉國下るべし汝と一所に在
の同たり 久生と利益と一と併勅実あわると善光隨喜の涙よく
とて思ふやう此如來靈吳天下にくとけり殊小上宮太子法歸敬
あまんとて王命と窺ひく後悦び勇と如來と負ちて吾奉必と
下る情万法一如の道理と按に迷ハ則日本信州の樓茅屋土生乃

小屋乃土人悟と百濟の基はるが莊嚴微妙の仏界之素より家
の内小清三物とて白より外なるは此上小如來を安並し奉りけり
親子三人俱々朝夕恭敬しむをりれ供養をり奉りけり

如來當國わ伊那郡に止住し奉り既小四十二年其間なり
人皇三十六代皇極天皇元年壬寅小あつて如來告く宣く當國
水内郡羊井郷小我と遷とて是より後彼所に機縁有なりや
示現彦く及びくは則水内郡小を遷し奉り善光前より思
ひし如く佛と一所小住ん可恐ありとて住居の西に一字草堂を
營て本善堂と号し如來をうり奉り此所より又元の如
く善光が家母が歸り結ひたる不思議ありし事とて形也

一時油小奉りかきて佛前の燈明を挑ざりきれば如來光明を
放り結し家内白昼の如し善光祈誓やたるは其勢を以利益
詞とて演がく願くハ此光明を移して燈明香の火とすめい

和漢三才圖會
 欽明天皇十二年本尊如來自
 百濟渡來而未信推古天皇
 元年草創建寺於伊奈郡麻
 績里宇治村



末代又傳人存を利益衆生の結縁誠に功徳計りてしとあり
 光明即佛の頂にうり又眉間に光を放給ふ小香のほこ油
 小のり照させ給ふそ不測なる如来偈を唱へてあり

- 一度見常燈 永離三惡道
- 何況挑香油 決定生極樂

是即如来れ心光みして三有の衆生乃迷闇と照し給へるはを
 とのへ結し文なりは是に如来寶前の燈明と眉間の白毫より
 出る光明して救百歳を經ども更ふ備る事如く今猶佛系
 以て中れ結しとあり火是ちて

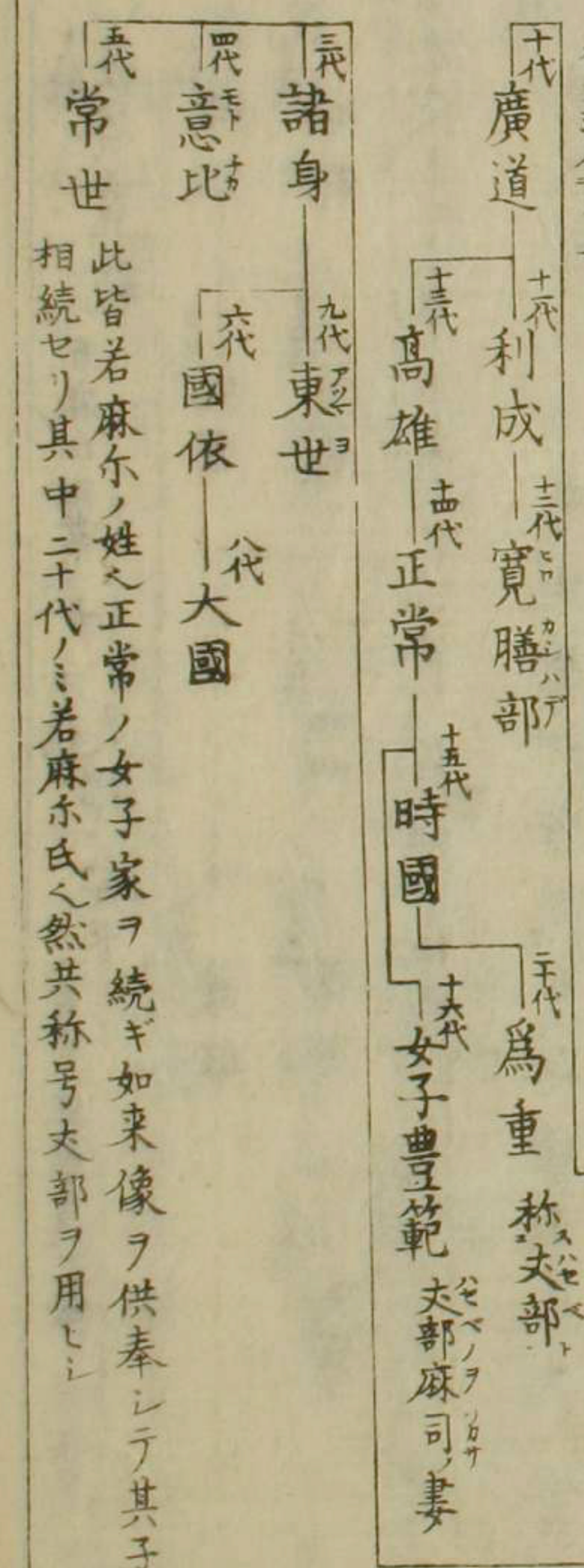
其後如来御堂建立れ事々佛門のは願とて繁然御造營たり
 抑材木と輓に至りてさるは不思議なり諸天善神衆向りて
 難くともぬ材木自ら踊り歩む如く彼靈場少や集りて
 金堂を造るに糸勒井工匠と現して是を造り給ひ修造す終り

て後忽彌勒井と有りて天に昇らせ給ひける彼井造營の間をみ
 給へる所に一向をまつらひ今れ世小至る迄糸勒の向と申さる今此
 善光寺の日本の邊地めて凡丈薄地乃草創といひても井のほ手と
 以て建給へる魔障あとも却り守護神と成るは事故なく成就
 せし靈場なれば何人うまをを作げんや父か諱の字をりりて善光
 寺と我号しける如来を供養し奉る檀那畧系

△若麻續東人善光 三年

信州水内郡本多人
本多武作善田

二代 若麻續善佐作留
七代 若麻續高侍



此皆若麻尔ノ姓之正常ノ女子家ヲ続ギ如来像ヲ供奉シテ其子
 相續セリ其中二十代ノ若麻尔氏之然共称号大郎ヲ用ヒ

○長谷豐範

若麻尔正常女

丈部ノ安平

丈部ノ麻司男正常ノ外孫

時海	知里
時郡	知歲
	知門
	高節
	知隆

右檀越交名れ次第益尾見くく氏姓と相續人々如件 縁起同文

和美三才園會

欽明天皇十三年本尊如來自百濟國渡來而味信推古天皇十年草創建寺於伊奈郡麻績里宇沼村而後皇極天皇元年依佛勅移水內郡建立本願寺名本多善光因以為寺號慶長二年七月秀吉公以本尊奉入於洛之大佛殿然佛不悅而有奇祟故同八月復奉還

聖德太子為欽明用明二帝及守屋之徒菩提於清涼殿七晝夜令行念佛三昧而遣小野臣好古於善光寺奉一通書其文曰

名號七日稱揚已 仰願本師彌陀尊 以斯為報廣大恩 助我濟度常護念

八月十五日

勝鬘上

本師善光如來御前

好古乘黑駒馳至以本田善光献上之善光副硯紙入之戶帳中則有返翰其文曰

一日稱揚無恩留 何況七日大功德 我待衆生心無問 汝能濟度豈不護 待賀禰天恨止告皆人爾何於何都天急加佐留覽

八月十八日 善光

上宮太子御返報

右歌載風雅集曰歎止可告蓋太子與如來往復之書凡三度七言二句或四句八句而其第二次法興元世一年辛巳十二月十五日調使者黑木臣其返翰藏法隆寺年壬午八月十三日調使者九人其返翰藏法隆寺寶庫而勅封緘無嘗見之者神佛靈異之有無也不堪論

按埃囊抄等小史載之詳焉竊以年號雖有孝德帝大化号中絶後天武帝大寶以來相續故為之

年號始然則推古帝有法興元世之年号乎所味
聞也且此時文章未備而七言詩肇於大津皇子
四十一代天又聖德太子薨去推古帝二十九年辛
武帝皇子也所謂支干皆當薨去之後也疑件文章
及年月等後人添妄說者乎

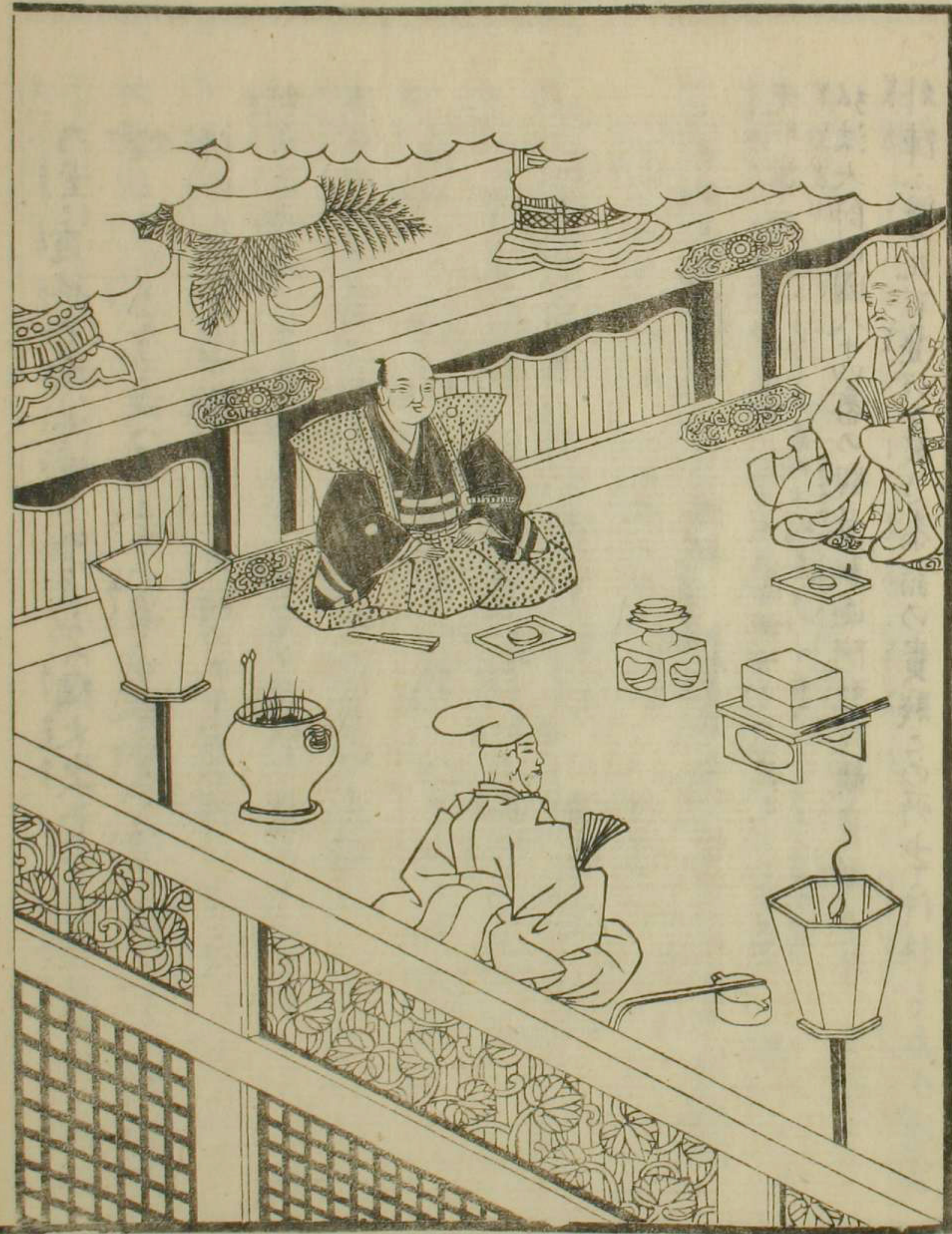
古著聞集

鎌倉右大将上洛の時天王寺へ来りて色とりける其時鳥羽の宮別當
ありて人びらきりし御對面ありて幕下ナされりて於朝が一
期りゆき一處りしは善光寺の佛袂に奉りて二きびに
甚うらそりて定印やけりしゆりて乃とびら未迄の
乍めくはくしきりしは定印やけりしゆりて乃とびら未迄の
侍てしきりしは定印やけりしゆりて乃とびら未迄の
と只人ありてさきりて我文作らりしやけり

欽明天皇此御宇より孝德天皇の御代近年救百二年の間に宮
殿小戸帳をかきりて如来ありて拜されしゆりて然るに白雉五
甲寅此年に當りて如来告まされしや宮殿を營り我と納り前
に戸帳となし其故ゆりてなれば不善造惡の輩悉く我前小

寄る臭氣をくけよと云う我是を厭ひてとて却て遂罪と成
て皆惡趣小墮するなり依之ん驚き恐急に宮殿を造りて戸帳
を掛秘件となし勢結し是の始なり

按るに善光寺に佛閣夜々回祿小乃く有馬の相を承りて
して如来の薰位を以て天下下の衆生志を屬し再建程り成
就り其古も舊記小見之を今縁起小載る所と見らる高倉院乃
御宇治養三年己亥三月廿四己の刻小ありて悉く炎上なり
そのち龜山院の御宇文永五年三月十四日夜半に炎上是九十二年
同方り又四十八年以後花園院の御宇正和二年三月二十二日酉の刻炎
上なり其後又八十八年と過後光嚴院の御宇應安三年四月三日夜
寅の刻炎上又後小松院の御宇應永三十四年丁未三月六日午乃刻東
の門より火發りて堂塔一字も不殘燒滅又後土御門院の御宇文明年間
冬とありかく度りて火災小を一光三尊乃靈躰或々忽然とく横山



正月朔日卯の時
 如来堂小く
 年賀の
 規式



難波の小謡と
 うらたて三度
 一花ひらくは天下
 こねたはうれやよろし
 代乃を月安全そめてる花

乃堂に飛移り或ハ清厨子のりり猛火文小至冷錦帳の内光赫
 燐として恙なく或ハ紫雲小葉トて金堂ヲ移り移りて生身
 佛持たずして奉りある奇特のありきや作ぐべし信まを
 如来百濟國より奉朝あつて聖主十三代打續り清崇教より或
 宮中に安遷し移り車を何りしむ其歷代

- △欽明天皇 人皇三十二代 在位三十二年
- △崇峻天皇 三十三代 在位五年
- △皇極天皇 三十六代 在位三年
- △天智天皇 三十九代 在位十年
- △文武天皇 四十二代 在位十年
- △敏達天皇 三十一代 在位四年
- △推古天皇 三十四代 在位三十八年
- △孝德天皇 三十七代 在位十年
- △天武天皇 四十代 在位五年
- △以上縁起 日本書紀 天智天皇三年三月以百濟王善光王等以居難波
- △用明天皇 三十二代 在位二年
- △舒明天皇 三十五代 在位十三年
- △齊明天皇 三十八代 在位七年
- △持統天皇 四十一代 在位十年

光明常燈 在厨司の室前小なり不消の燈明なり其く光の 後堂あり
 弘法大師四國八十四番の觀音釈迦阿弥陀觀音勢至等と安置せり
 外陣小疊凡百疊祀と敷き糸詣の貴賤この所を神拜と毎夜通夜の

人影一〇向拜の前小中左右と賽銭管三ツ有〇外陣小定番乃臺あり
 其脇の花瓶に松を差そこれ親鸞聖人は生身の松とす 毎月朔日に
 又堂とよりて東西小鐘と掲より外より見得ぬ物なり常撞とやなく
 開帳の砌小用之〇戒壇廻りより有須弥壇乃東脇に入口あり措子
 かく下り内陣の下と三夜巡りて元の口へ出る寢に闇夜れ如く俗向小相
 傳り放肆邪修なる人とい所やくむと為り又怪異ありとい未詳
 御年宮 本堂の後より 此宮は昔ハ幡社なり今ハ横沢町に遷してその跡に
 毎年極月二の申れ夜丑の刻規式を〇鐘樓 本堂の東小者 〇昆沙門堂 本堂より東二丁より
 あり別當所の別業と云ふ 〇納骨堂 本堂の乾より 此邊本堂の裏通より諸家乃石碑
 多し 〇經藏 本堂の西小者 高サ四丈六寸二分横六間三尺二分四方なり
 〇佛供所 本堂の良小者 〇蓮花松 如来の末途 〇十六善神 西五九月十五日大般若其外
 〇秋葉宮 経藏の西小者 〇辨才天祠 同北 〇山王塚 諸神塚 本堂前左右 〇萬善堂
 別當所の北よりて 〇忠信次信の五輪ニ並立 三門の内西例小あり古代の
 東向の道場なり 安しく文字も斑小なり

○鏡燈籠石焼籠の支相馬彈正少弼室石川播磨守平岡美濃守室等と

始て諸國より奉納する所れ數九二百三十餘基終夜其光たゆる時か

一以上山門の内なり 三門(上)の月十五日十六日二季は彼岸三日
十五日四月八日七月十五日十月十五日十五日十五日

○三門高六丈六尺七分桁行十二間一尺三寸深間四間二尺四寸文珠四天王を

安き○是より二王門までと誌し○大勸進 西側より 別當所なり東叡山

比叡山より任職なり ○手水鉢 三門外列當所
の門前にあり ○天王宮 列當所の
南にあり 例祭

六月十三日十四日祇園會なり山車渡り夜々芝居狂言あり其外古雅な

れ祈り物敷多ありて賑ひ夥しく諸國より集宿多し是と善光寺の

法祭禮といふなり ○六地藏 ○大佛 山門下東
側小堂 ○釋迦堂 世嘉院
あり 本尊涅槃

槃の釈迦如來より天延年中越後國古多瀆より出現の像なり

○駒返り橋 ○寛慶寺 山門の
たの寺 慈覺大師れ建立すく浄土宗と

時の鐘あり ○定念併堂 宝林院小堂
高雄石碑あり十三年目毎小回ありと云 ○阿闍梨池 西本覺院
の裏あり 昔皇圓阿闍梨地身と

地蔵菩薩 金仏より西側あり
昔の本堂此處なり

成く此池に住るる詳から傳らるる間也

按ふ小遠州橋が池にむく比叡山肥後の阿闍梨源皇といふる智藏と三塔

無雙の學者なり法然上人の師なりは源れ字と賜て源空と名乗るに

源皇はよく業を以て伴道の淵底我一世の修行すく悟るまらるるに

勤の出を候く三會に曉を初とくは色どもそれまで命を保つ龍身

小く如く是小於て才子等と諸國小下龍の棲所を見せしむるに東

國の使者帰て来りて中より遠江國笠原莊小櫻が池といふあり南に

蒼海洋とて北に青山峯とあり其間小池水を湛く淵底測り

か一且澄澄して龍蛇乃棲る靈地なりと申し阿闍梨是を聞て

一夜座禪して一滴の水を掌れ中に掲げ雨風を起し雲小乗ト櫻が

池小到り入定し終ひるに波瀾もさるるや驟雨車軸乃さく雷電

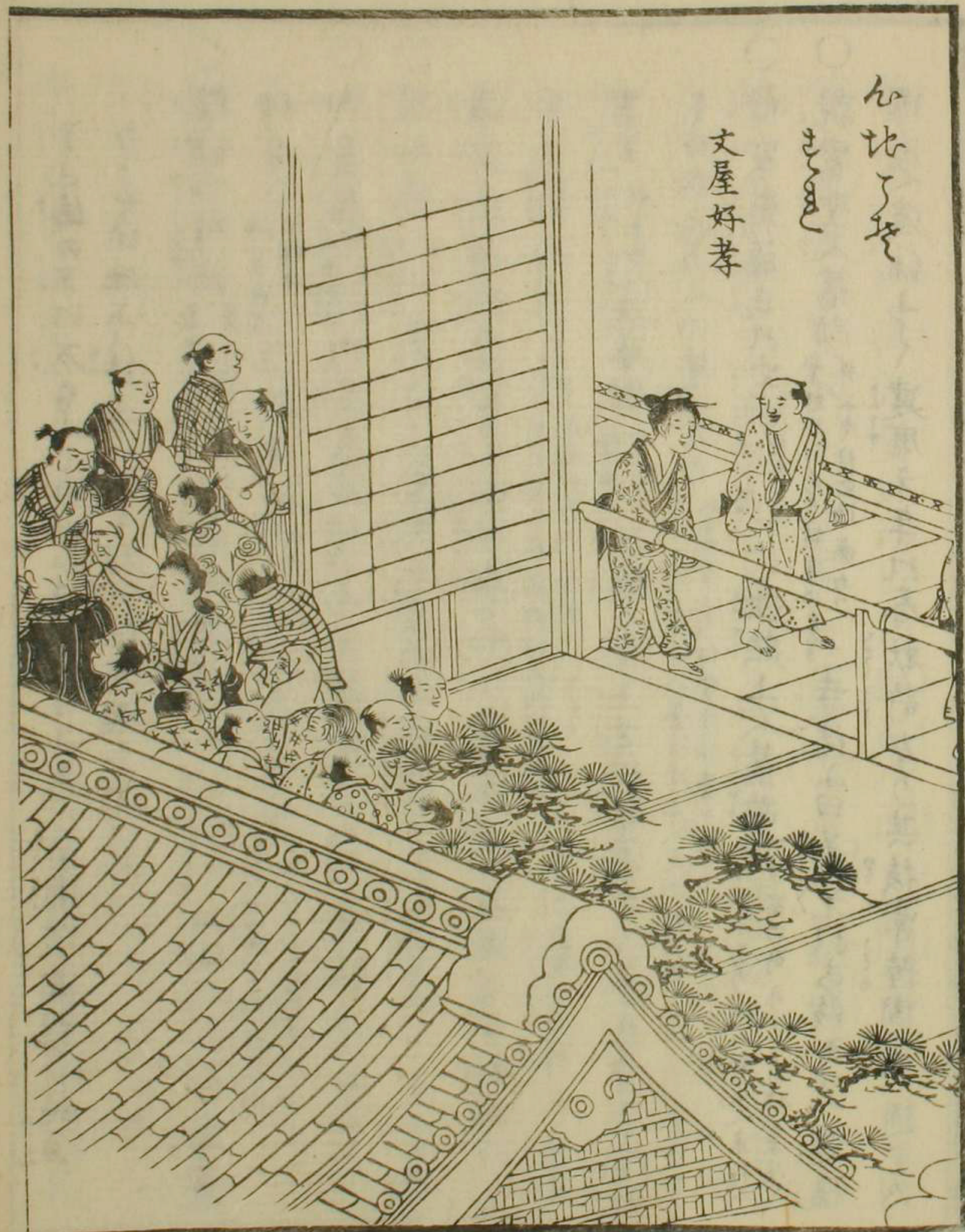
霹靂とて村邑動揺る其後源皇上人は圓小赴き比池頭へ歸り師

弟れ別を呼し恩謝の為弥勒經を誦し祇名念佛し終へ浅猿に

大龍の形と成り他上に頭と揚て落涙の侍り源空上人もその後

を流し師弟れ侍意あり本の人許すくはるるを多くとありしに

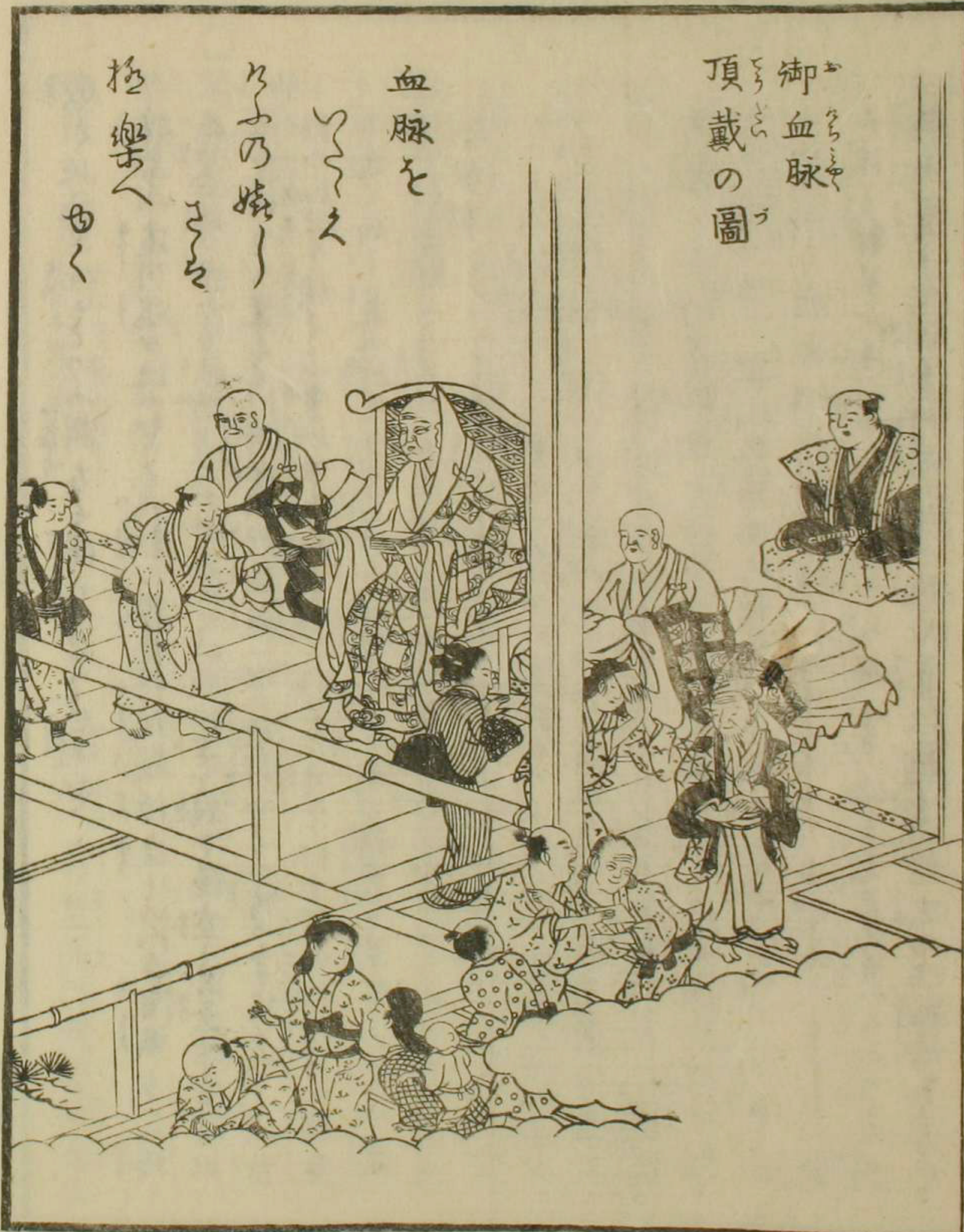
龍身變りて源皇阿闍梨と成りまに越方行末の古物語ましく



心比しき

きん

文屋好孝



御血脉
頂戴の圖

血脉を

つゝえ

りよの娘

こゝろ

極楽へ

ゆく

まて壽の下に入るとやういふ人伝るさまへ皇園阿闍梨地力と
かりては池小住るといふも極が池乃類ひ形とく

○諏訪明神社 麦石の東に在る 祭礼九月十四日 ○熊野権現社 同西に在る祭日 九月十五日 此両社一山の守護

神あり 神主斎藤 下総守 ○飯繩社 一山の火防 ○閻魔堂 同王の先年焼失り

○御霊屋 大本願の北にあり 浄土屋及び近年宮の宦府より此浄土普請なりやといふ

○摂待所 同所 是より上壹町斗左右小店連りて数珠屋町やと東都

浅草雷神門の内なる小間物店の如く如來浄影の掛物并小教珠をて

多く高小○二王門 高廿三丈九尺二寸桁行六間四尺六寸 梁間四間一尺二寸南に二王あり 北に三寶荒神三面大

黒天 仏より ○大本願 紫衣の尼寺 住職の堂上方に姫君ゆく善光寺上人と称

をも日本三上人の其一たり 日本三上人といふは善光寺上人尾州勢田村 普願寺上人伊勢宇治慶光院上人

○社家齋藤氏住宅 同南に在る 下総守と号 ○法然上人舊跡 同返留の所ありて自作の本像あり

○親鸞聖人舊跡 堂照坊にあり毎字の号あり 并小肉付の浄齒あり 寺傳小曰兼元は浄聖人越後

國府へ遠流しく建暦元年に春勅許なり其後常陸國へ浄通り乃

節當山之浄佛詣堂照坊に浄返留此間戸隠へ浄糸詣の浄
歸丹風越といふ所小暫く浄休の時浄手履小路傍に岩盤を
採りて文字の形をたし終ひ即其夜堂照坊ゆく毎字の
名辨を授與しりといふ風越の名号ともいふ 建暦元年庚未年三月 上旬法隆寺の浄堂照 坊茅二十一世阿大連 教智比丘の代なり

此當山如來へ浄糸詣此時花雲を差上給ふ今に浄親
鸞松といふ傳 本堂正面の太鼓壇にあり 毎月朔日小神替りあり 聖人肉附の浄齒一あり 堂照坊に

七十四歳に浄時ゆく便御詠歌一首あり

つ川乃ゆふ髪に霜ねと一葉落ちありみそとまを所浄陀伴

まて元仁二乙酉年四月十五日浄止宿あり 堂照坊茅二十四世空阿大徳 了意比丘の附代なり

○聖徳太子鏡に御影 浄願坊にあり十六歳 自作の本像なり ○二天門 先年焼失りて 役の残まり 東の方
制札あり 松代彦より建 西の方番所あり糸詣の諸人坊へ着く者は浄より
案内より本堂より此礎まで長四丁中三間余の敷石基盤の面乃

爲別。其樂一也。是故雅信日到。而興無盡動則感
 來神往。榮辱皆讓。噫微先哲之誠。誰能憶歸銘曰。
 嶺然高樓。既高且邗。保以佳景。援以四時。
 節物一倡。萬客來熙。幽賞搖情。燕興從思。
 寵歸其主。永昌朕茲。山水貢壽。梵王頌禱。

○善光寺三寺中とて四十六坊あり其内衆徒二十一坊ハ
 宝林院 藥王院 吉祥院
 福生院 光明院 蓮花院

常徳院 教授院 最勝院 常智院 徳壽院 尊勝院 本覺院 玉照院
 世尊院 長養院 常住院 宝勝院 威徳院 良性院 田乘院

以上清僧方り又中衆十五坊といハ
 堂照坊 堂明坊 行連坊 正智坊
 向佛坊 白蓮坊 鏡善坊 淨願坊

野村坊 兄部坊 正信坊 淵之坊 以上妻帯方り又妻戸十坊ハ
 其妙坊 正定坊

壽量坊 常行坊 遍照坊 称名坊 以上清僧之此十坊昔ハ時宗ハ妻帯方り
 林泉坊 蓮池坊 玄證坊 善行坊

今ハ天台少ク清僧と成る黒衣小五条と着以規式中ハ氣色ハ猿衣方り

○寺領 千石余の事小割 内 百石別當大勸進 五十石大本願 淨土宗

百六十八石衆徒二十一院 七十五石中衆十五坊 三十一石妻戸十坊

百二十石佛供免 大勸進 持方り 百二十石燈明免 三十六石大工免 大本願上人持方り

三百石造營免内 百五十石大勸進持 百五十石大本願持 以上

○本堂詰番昼夜八人宛内。衆徒四人。中衆三人。妻戸一人なり。所由て
 如來所教の寫し清浄文不淨除の守并に火打石等を授く

或老僧の曰む。兵乱の以依法も甲州乃属國と成。武田家より如來
 を甲府へ移さる。甲府没落の後大岡秀吉公京都へ移。大伴乃腹籠

とれ。後其後官家より先規け通。還堂なり。久多し。より靈
 威治増り光耀四方に著。近里遠境乃老若男女貴とれ。賤とた久

峻岨と厭ら。寒暑を凌。歩と運。も靈伴乃威後。形久
 又或のい。昔如來依法の伊奈郡に産。時善光の夢。小我を當國

水内郡に移。其苦。乃。素より善光身。自
 自カに叶。是。小。信。國上乃。諏訪。武井。社人下の。諏訪。春の宮

の社人。曰。秋の。其。社人。其外北野。高。宮。本。平。手。和。存
 園根。七。澤。穗。谷。金。沢。坂。以。等。社。家。十五人。今の中衆

守護。今。如來。淨。年。越。の。規。式。小。麻。の。淨。衣。を。着。以。今。地。小。移
 守。護。如。來。淨。年。男。中。衆。中。勤。但。堂。照。坊。堂。明。坊。此。後。淨。衣。三。十。三。人

○如來の淨年男中衆中勤但堂照坊堂明坊此後淨衣三十三人
 年。如。來。淨。年。男。一。人。淨。年。男。勤。但。堂。照。坊。堂。明。坊。此。後。淨。衣。三。十。三。人

其夜并に除夜より正月十五日迄白麻の淨衣袴日くりお
小當り人ち一ヶ年潔斎ゆく湯福妻科武井三社と云此三社日集
飯繩山戸隠山へ月參方り○翌年此年男へ今年此堂童子より
送る物あり大根を湯根陰根の形を作りて二折お入く候々

○年中行事 ○正月朔日卯刻朝拜といひ規式あり大勸進の名代を始
め三寺中惣出仕是を客と称して勅盃の式あり口取小大根乃塩り菜
け塩漬二折なり右朱より定る謠ありて大勸進の名代這々む其のら日
音かり其文句二花開くれ天下ふれ春かきや万代のる安令を
目出くれ是をさる度返して信く堂中の座配亦令く善光宅れ右例
う清年男の亭主の振めく各退出の時送る出

○同七日寅乃刻惣出仕して開帳ゆたの次小終正會別當清印文の加持
あり其後小三頭代其基と通稱く是も武田伝吉より法免の由ゆく如來へ清酒
を供へその内ちと法年男と甚き備門と盃奉り

○二季の彼岸曼供會初中 ○三月十五日會式あり ○六月祇園會十三十四
西日

あり山車山車燈籠燈籠と云々通稱を美と云々注四の
事清く足と云々拜を儀合大根なり
版を打て大念佛七 ○七月十四日施餼鬼納骨堂に
持く執り

○十月五日より十四日迄十夜念佛美合の阿弥陀仏一辨開帳十夜修りてはは厨子
の礎大勢を大本に隔月廻りたり

同十五日如來正覺れ日ゆく會式あり ○十二月朔日より法年男諸大
本堂に參觀 ○同日七五三繩張中衆殘らば法年男坊小兼令して祝

儀りり赤飯を惣寺中へ配る ○同く七日より十三日まで昼夜列奉念
佛施行妻戸をりゆく勤行是とトウく念佛といひ本田善光命同十二日
十三日ゆへあり

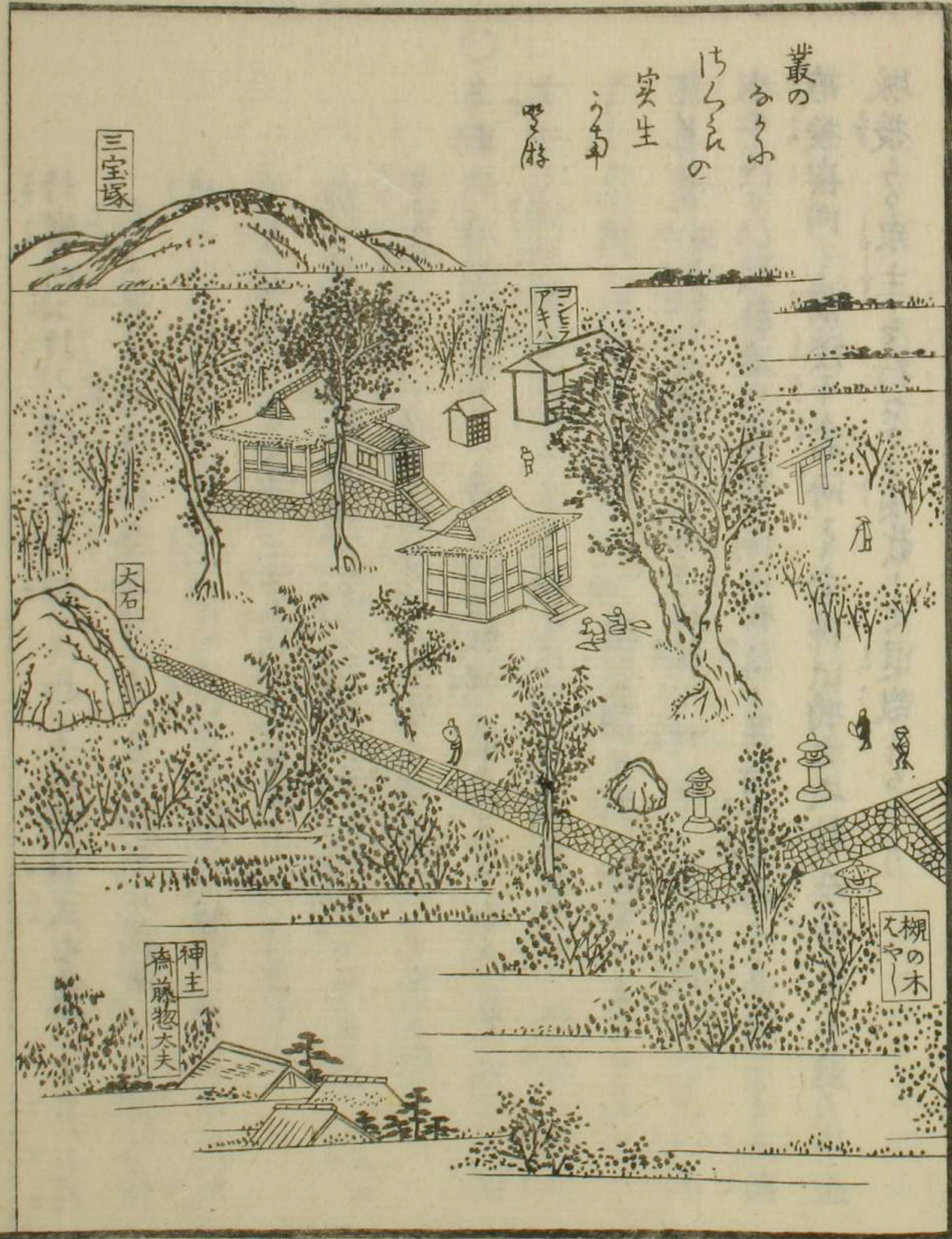
○同九日法年男より濁酒の酒法堂へ献備 ○同十日松を中け祝儀
大門町の傳馬役として百姓十人門饒の松餅搗け薪牛王杖等依

法年男の坊へ納る ○同廿一日女人禁制ゆく餅搗鏡五飾と取法年
男の内小志めと張置除夜小至り清堂をさり正月八日お下る ○十二月

二乃申の日夜入清年宮に於て如來法年越の規式法年男淨衣
と云々五の列秘を

なる依く其行ひ知ぐ但備物を一尺角折麦小片本云救を

なる依く其行ひ知ぐ但備物を一尺角折麦小片本云救を



叢の
ふくふ
はらふ
の
実生
うま
り
り



妻科村
妻科神社 神名式
祭神 建御名方命
八坂斗女命
貞觀二庚辰年二月
妻科神ニ授從五位下ヲ
同五癸未年授從五位上ヲ
土人妻方一の宮と云
夫木
あふうたむや
ゆり乃
つる年一
あやそ
ま
るん
う
権僧正云朝

七何とときぬる旅路のうら
ま ありれい獨麻のけ
仲、葦狂歌併圖

行實坊に於て佛事と修し和事の誦誦文を捧ぐ芦毛馬
一疋を牽き唱導れ施物等とさる此馬は祐成が家期の時
虎子あゝる馬なり乃今日出家を遂げ世間善光寺に赴
く于時歳十九歳と少者緇素慈涙を拭くはた

時丸塚 美和村 伊勢町新町の境あり越後 柏寄塚 柏崎殿の下の今所裏にあり 兄弟塚 見前 三門内西
の方に並ぶ是を忠信の 五輪の古塔あり文字も池小苔ありて多々難し

○毎朝六ツ時開帳あり○毎日清血脉頂戴といふあり是は前夜旅
宿より圓所姓名と記し是を後せば宿より別當所へ中込を冥加
せしめて小紙一折を上系 是木のゆ福 備聖朝恒例の開帳ありてまより
万善堂 列南のの 道場あり の廣庭に集り居銘く呼出ある時路次口を入手
水を流し大勸進の内仏の向小相話る其時方丈出く高座あり系頓
戒授與同く満談十念済く念佛の時方丈轉座曲系小懸り清血
脈授らる衆生と行なり頂戴して退散するなり

○善光寺今れ如藍造營の事 元禄十四辛巳年十二月廿五日より戒善
院慶雲日本廻國あり奉加る一故に普請此儀江戸表より松代彦
古奉行在 作出同十六未年五月十九日江戸大工万兵衛と云者来り枘本
積本寄等執斗 但元禄十三庚辰七月廿七日下城小海より出火焼堂并寺中丁とと 焼失あり慶安庚子年再建あり入仏より五十一一年あり

- 清堂地割坪数工敷之事。惣屋根坪数千百五十二坪八十三重
- 一 桁行廿九間三尺一寸 一 梁行十三間七寸二ト
 - 一 桁六間七寸六ト 一 出端三間一尺八寸
 - 一 向拜坪数廿二坪餘 一 桁行三間一尺六分八厘
 - 一 脇向拜出端三間一尺八寸六ト此坪数十六ト四重八毛
- 惣地坪合四百三拾五坪九ト六毛 但一坪小付三百八十五の積あり
- 凡合大二十六万三千六百廿六ト同手傳二万四千五百三十三ト
同手傳二万二千五百右工料合て金二万九千七百七十四兩三分六厘余 但大工二人付 二及八ト積
- 同手傳二及五ト積 木挽一人付 二及八ト積 同手傳一人及五ト積 惣屋根の工料令七百三十兩一分五厘八ト

過善光寺

南亭

傳聞露像紫磨金。西域飛來利益深。邈矣當年善男女。依然此地古祇林。旭峰雲靄和鑪氣。丹水波濤帶梵音。不是群生同渴仰。公程豈許此攀尋。

伊勢荒木由

久老

若ひより寺々月又今宵の半

宗祇

月うらや四門口字とくくく川

芭蕉

遠のぬたれ極樂や布やきん

支考

むく起りく修涼や堂まの棠

慈竹

又後日は蓮臺しろは若井の那

露川

糸く福のたぐぬ園よりきくてぬ

曾木

山も眠はまねやまれば静け

盧元

静くくたらま志落乃ひよりけ

輝牛

新波のふわと持めし佛も今に信はけよみろ此寺

蜀山人

我國よみのりれ聲をきくは清仙やは失かる後

判忠

○新菅堂

寂照院住生寺と云
浄土宗智恩院小属

善光寺如来堂より西八丁山手にあり寺内小親

子地藏并に来迎の松あり東南と曠く見下して風景好き小院なり

此新菅実照坊等阿法師の入皇七十六代近衛院乃浄宇筑前國主加藤

左衛門佐重氏同國三笠郡新菅の莊博多の城より居住なり重氏二

十一歳に春花の下に帰らむるを忘と酒宴と催し抱負の折々春乃

山風ふ蒼や花一輪落く盆中の浮む重氏はくく是を觀相して

誰う百年を期そ人あむ頻に無常れ心發り妻子殊實を厭離し

左所より捨忽然として帝都に赴き敵岳小登り西塔黒谷を

敵空上人にさく刺髪しきう等阿法師と号し于時仁平二年

四月二十七日ちり爰に筑前箱崎八幡宮に神院小依り弟弟子

源玄に從候し念佛修行者と成り十三年と後高野山小登り

曹錫せり然るに嫡子石堂丸母りると重氏の行果を身に到りけり

とも恩愛を菩提の障りとして捨て親子は名乗らうりし故永万元の
石堂九判髪して寂照坊の弟子と成り信生坊道念と号し等阿
傳思へらく親子一山小在て愛念捨ぐと正治元年八月中旬
信濃國善光寺にあり今往生寺の境地小草菴とむさび日如來
前小緒一會仏の外又餘念もあうりたり或時通夜の爰に善光法沙
内室柱の前娘千代鶴うらび十里の前善光寺如來に六地
蔵と現し寂照と地藏の化身かりと争く地藏の像を造立して衆生
を化益あえりと告終ひく夢覺ぬ依り地藏并と建立して人
皇八十四代順徳院の清宇建保二年八月二十四日享年八十三歳ありて
往生あり其夜高野山ゆく道念法師冥夢と感し父寂照乃今終
務ひたりと急死善光寺に到り大法舎を修し等阿自作の地藏を
を拜し道念と曰くかこつに地藏并を造立し建保四年七月廿四日生
年六十六ありて往生せり云云新蓋親子地藏といは是なり

○薬山ふんじと薬師 善光より二里ありと五箇の方へ山上の岩穴あり
扇の如く木と見え出りてそが上小堂と建たり荒木田の久老考の文あり

薬山乃歌并序

久老

信濃の國水内縣小葉山といふ山ありて河平に山ありて切まきる
如き千石の巖の中らる木を著出して持れり入り
ひこりて屋を作りてその家ありてその山岸よりうち橋
を川物をつらして通る者ありて欄より又おろせば谷深
くつと舟を舟りてあそぶ者ありて川といふらうつとつと
油は此川をより流る出りぬとの家ありてつとつと葉師が
はられ石像ありて久老 致るにらの葉師といはれり少彦
名れ神乃みりてさるるかくつゆえに延喜神名式に能登國小大
持乃石像の神社少彦名の石像に神社あり又常陸國に荒磯
崎葉師善光の神社ありてさるるもこの神ありて石像なるより



春江補画



薬山
ぶらんどの
薬師
長原乃
温泉
山吹の湫
薬山の約ヶ岳の
山脈より駒形
明神の宮より
ウツ友名とん
中山道の
約ヶ岳小
のりき

山吹や
日丸
永糸の
温泉は
あほひ
中彦

三八四十一

続日本後紀小見くより此神の神像を石めて造るたれり
抄ゆ病をねむ道をしんすいより茶師乃名代抄り
奉るりのうをいれは薬師とすを守を必との神ふれり
ゆはす終ひかるる

これ神少彦名の造りたる茶の山にきりきりをも 久老

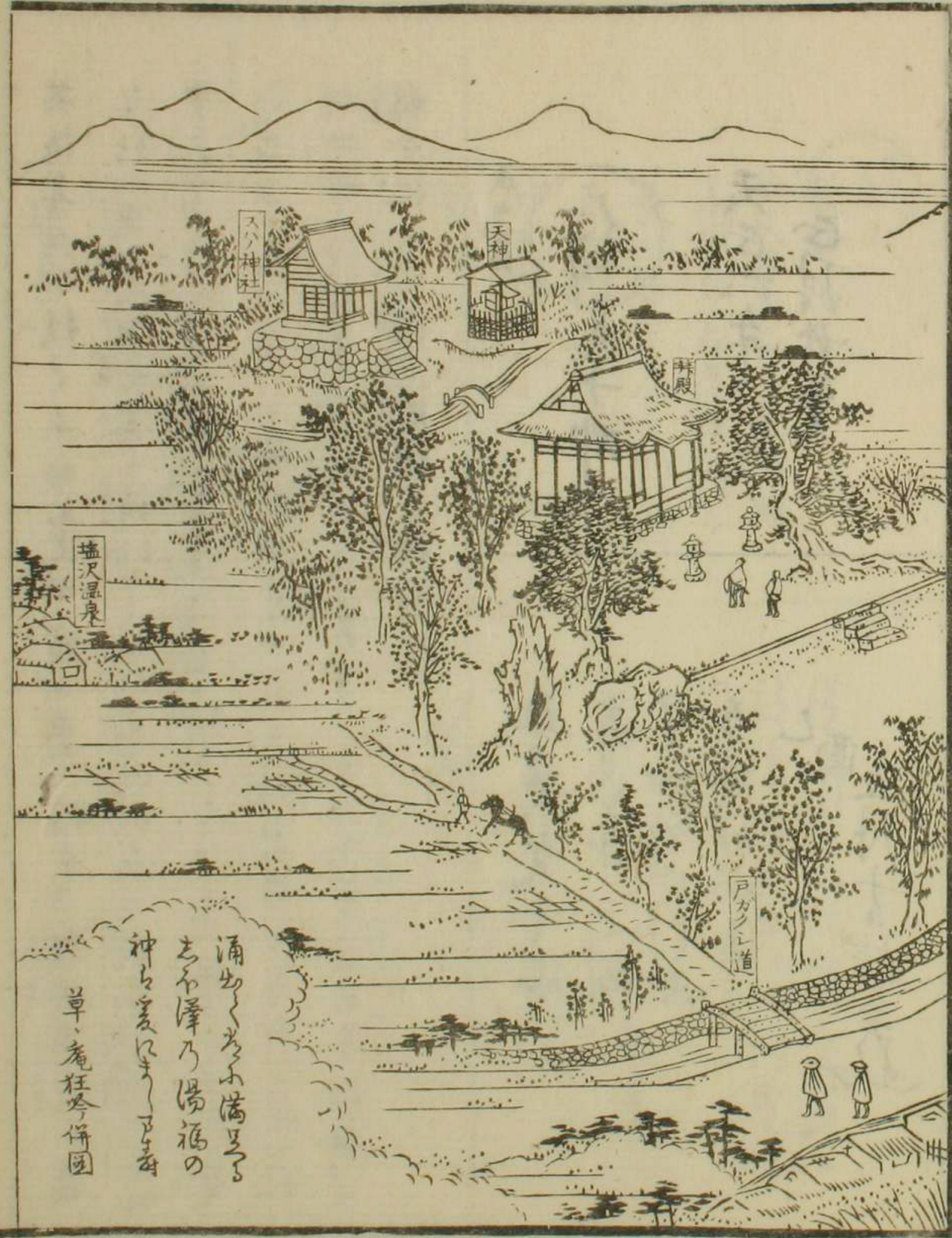
おの緒乃命のよと茶山たる川流をいむまひてれ 後足

薬山の麓を巡りて四丁奥小長系れ温泉あり其下の流を浅川といひ
山吹乃瀬ともいふ兩岸に山吹多くある故名ふあふるる春の末夏
れちど先以川色の岩種小遊草とち交る酒酌と盛かんを流し家治を
忘るを病を治し命と延る仙境のむびるる

いづれかおを海の日敷を流してまを流し山吹のむ 若殿

湯福神祠 如來寺の西より 戸隠街道なり是より登の坂路ゆく下り
若光寺ニ社の基 なる先八町宅を塩沢といふ所に温泉あり人家の側は浴室とくゆへ

火を焚佛も味ひたつゆりまより七曲て坂路を登る右れ方に清水
の涌出あり豊清水といふ岩舟と二ツ並上ると旅人の用とたり下
を牛馬に飼ふゆと登る大石とて大なる岩左右におまはる女夫石
風越といふ所小別道道の石標あり 左戸隠道 右在に及 此所の福壽庵に風越乃
地藏ありまるとく荒安村小針る右方の山小飯繩明神の里宮あり傍
小仁科氏なる郷士 秩石 あり是は明神の社勢ゆく勤行の服麻上下着せて
を徑を補るといふ其家系れありと関付るに頼朝公の以より千日
なまといふ仙人飯繩を無小住と飯繩權現の社司たりは奥に仁科の森
乃城主小仁科尾張守とて武田信玄れ舞ありしが永禄四年三月甲
府小徴一故ありて切腹喪の城廢るいりて男子一人女子一人を家
士等ぬ抱して此山小遊来り千日大を頼む諾して男子を頼り女子
を當山小遊とす叶はる故越後へ落り上杉家に召おるるなり代
替り謙信是を養育せむ 此小女成長の後を其の奥へ嫁しむ名家の胤をれば
とて妻の氏を以仁科と改め今藤上杉家小仕友なり



涌物くろみ満里
 去不澤乃湯福の
 神と爰にまゝ
 草、庵狂吟併園

湯福の神祠 祭神諏訪
 戸隠街道
 塩澤温泉
 横沢丁八幡



三十四

其後年月と経く十日大吏甲府小登り信玄乃機嫌を窺ひ罪
 なれ小兒一人と吾等が許に申すは仁科の家を立揚り之
 申しを信玄いり怨敵乃跡何を致久十日大吏嗣子かたれば幸
 ひ貴子と云はれんと輒仁科甚十郎と認免朱印を押して是が仁
 科の跡に控授ごとく賜りぬと色より十日をあらとめ仁科と
 稱を依之古證文敷通を納む

朱印九珍

仁科甚十郎

天正六年

正月廿三日

五貫文く取
 奇を申之間
 量油新由利念
 手頃以上
 酉
 五月十日信玄取

朱印九珍

飯繩山々事

此父典之有拍外時
 不之五右衛門以御
 武運長久々行念
 不之致退轉也
 由水俣

弘治三丁巳
 二月廿三日

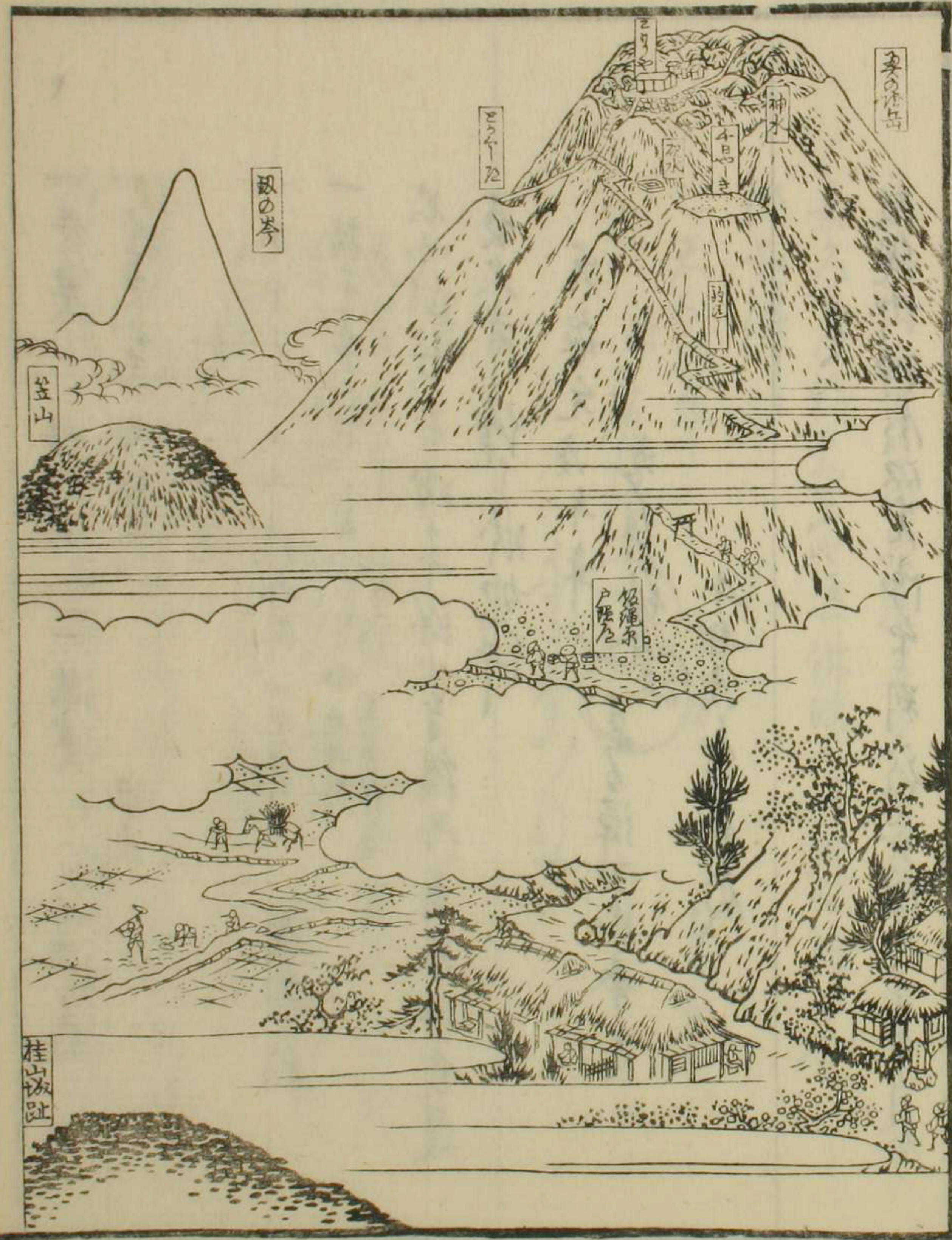
飯繩く
 十日

從沖お振込納く由力
 被清撫へ致致行由念
 仍水俣

丁卯
 十月十六日
 朱印九珍

飯繩く
 十日
 由水俣

信州飯繩大明神由社願々事
 一 致信致費 上野角 一 志費六百 上屋角
 一 珍費 小湯角 一 志費 小御角



飯繩の里宮
同奥の院
鍋蓋権現
笠立山
紐の岑
仁科氏の宅
桂山古城

一 寺費 一 換月 一 指費 一 千田月
一 寺費六百 市村月 已上

新寺寄進

一 寺費三百 入山月 大文 一 七費 廣佛月

一 指寺費六百 南月 伊毛井村 寺家梨窪山月

右此付彼寄附年派之寺構所為家寺氏運
長久者 作之狀如件

元禄元年 庚午年

九月 卯日 朱印 寺家梨窪山月

千日次御奉之

定

版繩所神所取先高平到法寺附之上之自今

已後派寺之五山和邊年竟所由家寺氏運
長久之所行急寺之五神略之送所之件也
仍如件

天正八年

仍於尾張寺 寺之

田三月十日

寺家梨窪山月

定

後四官 寺家梨窪 九官寺 寺家梨窪 半寺 寺家梨窪
後八 孫家梨窪 寺家梨窪 道久 孫家梨窪 孫家梨窪
寺家梨窪 寺家梨窪 寺家梨窪 寺家梨窪

版繩大明神如旧規本山寺遷文之寺在寺不還候
以有右指七人寺家梨窪及寺家梨窪寺家梨窪

修造して清浄嚴密にこの被動仕へに被
作初也、仍必件

天正八年

三月十日

朱印 海部良法也
九珍 千々重あふ

此外の古書墨之右の古契文と云々今を見るにむう 神領此許文
たる社頭の莊懸から半思ひたるはべ

飯繩大明神祭神と天神第五偶生の神大戸道尊と齋祭本地大日
如来ありて即不動明王変相ゆく後らせ給ひ火防隨一の神徳也といら
し多くありしと衆生濟度の為に地藏菩薩と現ト武門擁護乃為中
勝軍地藏と現トありしその冥感測るべくは 縁起下畧貝原氏云 是より本岳
奥宮に登る 鬼安より 慶男此道伴ゆく家僕小神供此調度也 び粮服成
三重あり

取持して攀頭凌面と踏むぐやえ坂を越え入坂をせよ土生れ小屋あり
主の老夫ら髮規服壞く柴の煙篋水俱心細くも夜に愁ひ遙く
登るべだつちちつ池 池 巡る飯繩原に出る二十丁を行て嶮
し坂あり 約一 岩角と足かろくして根笠不把十五丁のぼるは所
小千日屋交とて此一れ平地あり 十日大夫安原 俱利伽羅不動の石像苔
むして腰下ら折れ去るなりその石工の鹿拙なる中古以来の物小非
ぞこの峭壁不動の境とく清浄なる飛泉あり今も山崩岩落
てそれ跡も形く但峯岫の溜湫洄溪溢き山腰に七ツ池と成て
おろく号あり東より南西へ算まば所謂みのぐち 大池丸
池新池だつちち一のら等なり是より拾丁余のぼる嶮岨目も
眩くたろりやく言葉あり述ぐく漸く頂小斜り茶釜舎の茶ふ
く息を續ぎ汗を拭す川東南を眺らば富士峯幽遠ゆく和田
嶺あさやたり浅回山と煙もら昇るく同好とそれと知るは千曲

川犀川を悠々として龍蛇に横りたる等一其外作き見れば巖崖
ら凄涼と眼下に時立次又西北に顧むれば戸隠奥出嶽の山脉高妻乙
妻剣の山峯黒姫山に続き越後北赤倉山神戸原山鞍骨山笈摺
貝摺明光山北八条を群峯威儀を列ね尖峭やして緑雲を
黒く雪まると白く借る佐渡の嶋山を登ればおまへ北海乃陰浪天
を渡して渺々を

抑る飯繩が岳も既に冷際に至る時たぬ寒風来りて肌を通
雲霧常に朦朧として峯の露を稀くく今鳥也幸ひめて
一天晴明るれば登山して年来の願望を足ぬこれ併る大山
祇社神の擁護且ら天道に助る人ハ幸の幸と得人便神酒と持
燈明を挑け宿禰と敬白に板嶺の内五丁に北東根盤を分
兼根盤生えり結ぶる麦畑の冬一季林のり毎年里民を祈り新納し
香子に作り合の美味して竹の子は香ありとつり
沼田の畔に如く土相りたり小岩樹る砂系の根盤を分所あり是飯

砂のある所なり上面の砂を掻除く岩の際を歩いて七ひ出せば
級のぬく粟飯粒を採りて服を休小柳りりありて何の香気なく
風味とくもたし腹おえるとして障りて此砂をとりおえて
さうもかー家去妻おせんうと社司にち社司其佐言て喝く一握を
水に浸し煮又おる多めり人々味をちるふみぬく奇異乃かりひを
實乾坤の向小かゝる不思議の外おをありやいもご不閑
砂れ名に負つらうを世に書傳る飯繩乃文字ハ常々や飯砂を
と仁科氏お語るば文字の取ら花もありやとく驚く言を訥むる
ら藥艸多く今小黃蓮の花盛なりまの葡萄の蔓もこれ纏ひふ
て所々に村山やて花の家の中あり此靈岳三十六の巖窟十八乃谷
あり北裏や雪所々に見ゆまの爰彼雨大岩あり又天狗の遊場
てハ凡二百坪もありる白砂や其碁盤の面れど一は深き小池三
有り今水毎月の央るに厚氷閉く巖れ浮くも又足すか其靈岳に
遊むる遠く千重の浪とちく崑山乃玉を指しありて遠く

むく西行上人の國
 遊歴者みどり戸隠ふ
 ちみんて板橋原を
 通らむがここの傍に
 児の巖を採花ちりて
 びみく子やとせと
 たふきねひーく見
 ぬの本をみてかいらやれそ
 ぞぬんつへけるまより
 戸隠の目乃侍子れ
 社頭木橋の巻り
 ありちり初花子の
 上人を見て此橋か
 つくのりりれた西行
 ちんらどとふるより
 ちやく本よのぼる



と口きこみりりきまば
 大のやうなる法例きこれが
 せはちりる上人のたの
 思ひとね 是と人よ
 何ん登りてら
 あらぬんとそ
 是より引返
 安曇郡佐野の
 うへ通る左明山
 けやわりとちん
 実と



其山乃寶と求むるにあり唯戸隠一里のみ僅一里の地なりなれば
あつむ人乃一度らのぼりて山神れ奇特を渴作し飯砂をも試
神言十三ヶ条縁起乃如く幸福を得んや何の持るあらんこれや明
の士人陣生とつらん海上暴風小途く圍らばも蓬萊嶋小つらん
窟髪れ老憐憫むぐ一室小饌も其器皿金玉ゆく蔬茹み煎薬乃苗
かりつらに齊しく浮世の外とぞおもひたりけれ

叙起

人皇十六代應神天皇れ御宇當山小跡を垂結ひしより五十四代
仁明天皇れ御宇まても登山する人もなかりし嘉永元年辰三月
學問行者始く山頂に糾つし其後久しに星霜を経く天福元年
春三月尊容を繕模し寶殿を頂上れ西窟に造管しより順路
ゆくいしきて士民登山するもを得たり天文元毫れ頃武四伝去
殊は渴仰し結ひ種々の靈驗ありとるより若干れ社領を寄附
し莫大の費用を輔く本宮を再建し乃ひ里宮を造管はる

其々前件の古證文と見ても知るべきなり

次くつら山乃麓小何去といふ村あり按し西行の歌も武士の習ふ
きさみら地びくく一わけ戸れもさうめそのいさひは初み出る地
名少や或の云は戸のあきりやアをてり付むしを戸やんゆわく退きと急なる

漢事始

遁甲開山記小曰麗山氏の時山谷肇く分る

天地の始混沌として未分とざる時只是水火の二物のとあり水の滓濁
凝く別地とれる壁は漸来りて沙を湧起がぶくたる今高き登
て群山を望むに其形波浪の勢ひのごやうなるとく知るべし其始
究く軟方り後方に凝増く硬し其滓濁の湧起りて高れ所ハ
山岳と成り巖濤れ不沙なる川と成り大海と成る其理自ら分
曉り右小つら仲起海陸を治め庖犧氏川岳を定免麗山氏山谷
をさる川をいふ海も只海陸を治免川岳の名を定め山谷をさる
夏少く始く山海を開きるやつら少くいなるはる

塩尻

朱子曰天地始^ハ想^ス只^ク有^リ水^ニ火^ニ者^ハ水^ノ之^ハ滓^ノ脚^ニ便^ニ成^ル地^{ナリ}今^ハ登^ル高^キ望^ム羣^ル山^ヲ皆^ク為^ス波^ノ浪^ノ之^ハ狀^ニ便^ニ是^レ水^ノ泛^ル如^ク此^ノ只^ク不^レ知^ル因^リ甚^ク麼^カ時^ニ凝^ル了^リ語^ノ類^{ナリ}

予そのくち杉州有馬迹き大甲山小登り侍一肘友有り一傍に宿を福一侍
ア一うげふ山の勢い法のまうとなりける勢州安徳郡小や排系とてるを
家の似所侍るそこに貝石山といふ岩山あり山上に石の中小石貝ありるを破て
出に飛杖しゆく螺の殻あり裏裏して黒石なり癸巳仲夏或人より
於ありて又そ侍りるはまば信法よや少將義行にの所杖の山の中に見あり
とえ兼定侍りしはゆのあさりるるは始まり茶袴の貝ると一般の物之蓋
太古此等も海中中ゆく丁竹有つらん朱子乃説を以て視るに海水漸時に退き
軟泥化して硬石と漸りしは貝芥との裏か食まれ回く化してろく成りて天地
のあいだ思儀もくくまはるるなり

善光寺道名所圖會卷之三終

